島原市文化財調査報告書第３号

長貫遺跡緊急調査概報

1986 年 6 月 30 日

島 原 市 教 育 委 員 会

長 貫 遺 跡 調 査 団

長貫(ながぬき)遺跡緊急調査概報目次

1．長貫遺跡の位置……7

2．遺跡の概要……7

3．調査の経緯……7

4．調査地……7

5．地層の形成（写真図並びに地層図）……8

6．遺物（実測図並びに写真図）……8

7．問題点，A．組織痕土器，B．土鈴の出土……8

8．結び……9

長貫遺跡調査団組織表……11

押図

第1図　遺跡位置図（9番の地）……3～4

第2図　遺跡位置図……5～6

写真図　（1図～56図）……12

現地における建造物の関係と調査区分設定図……22

現地の整地後の高低図……23

トレンチ設定図（一）……24

〃　（二）……25

〃　（三）……26

各断面図……27

実測図，(1)土器，(2)石器……32

はじめに

本調査は昭和60年10月１日から約25日間実施された。従って初めの段階は夏日であり後半は秋日の気候であった。

その間，地主の田浦明氏には種々と御迷惑を御かけし，又労務に従事された田浦正史，田浦秀子，稲田政久，森本武子，田浦みさよ，田浦フジ子，森本俊男，大町昌伸，田浦圭一郎，田浦孝一，酒井澄晴，酒井美代子，田浦朝男，大町好継，田浦明，田浦和馬，森永光子，山口ヤエ，村里マツ子，辻キサヨ，宮崎ムツ子，市川有明，田浦喜明，杉吉チエノ，杉吉クスエ，寺田スガ，森愛子，稲田カズエ，井上フミ子，森千恵子，吉田チエの各氏には，毎日大変の御苦労を賜り，整理に当っては宮崎その子，本多やよい，林田みどりの各氏に協力を賜った。

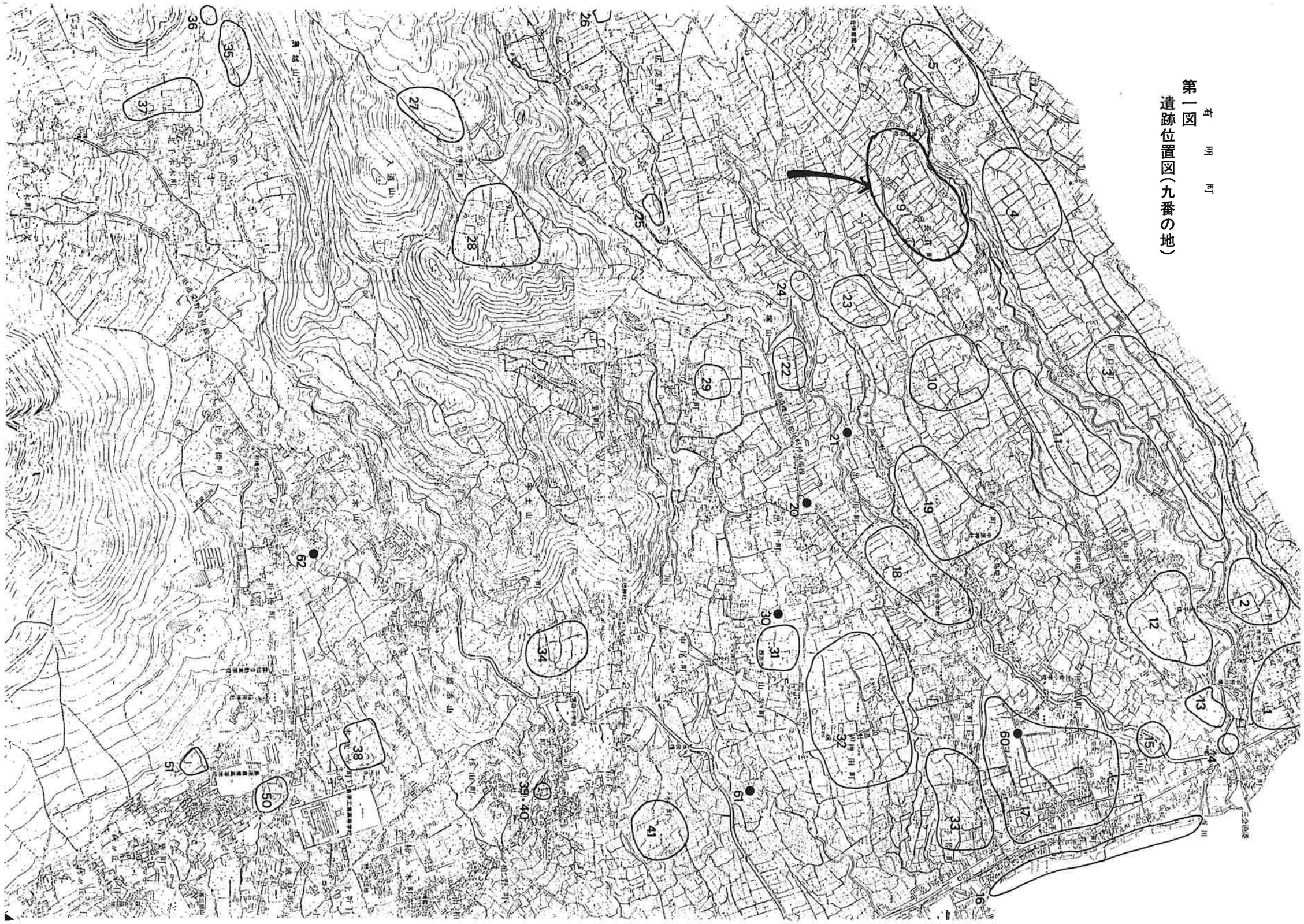
記して感謝申し上げ，また白山公民館にも種々御迷惑をおかけ致し，未筆ながら感謝の意を表したい。

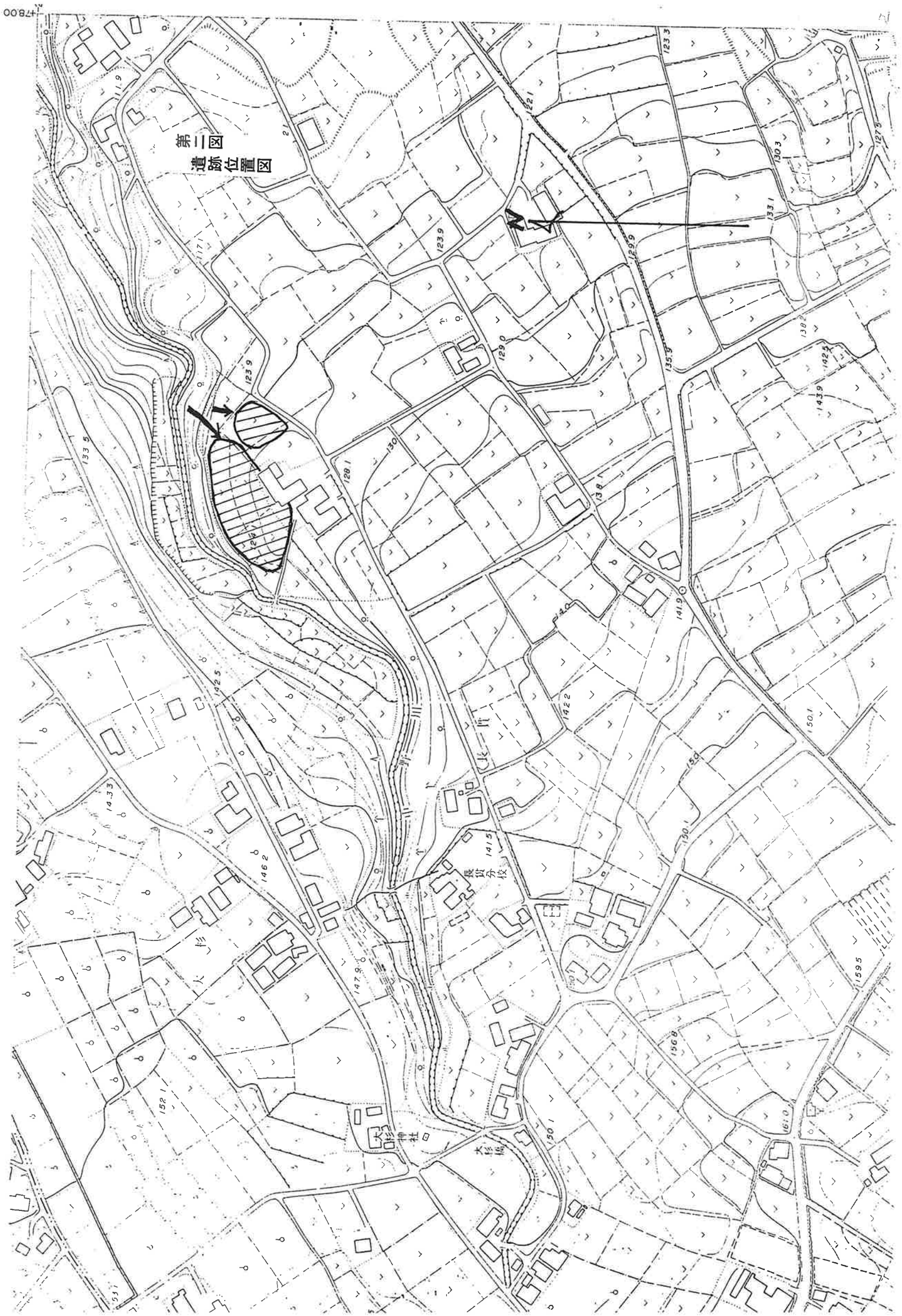
昭和61年６月１日

古　田　正　隆

有明町

第一図
遺跡位置図（九番の地）




第二図
遺跡位置図
長貝分校
大杉神社
大杉橋
+78.00

長貫(ながぬき)遺跡緊急調査概報

古　田　正　隆

1．長貫遺跡の位置

島原市行政区画の北側で，旧三会（みえ）村の縄文後晩期遺跡として顕名な黒川式の[註1]礫石原遺跡の下方，標高120メートル余の北々東約1,500メートルの地点に位置し，昭和58年３月長崎県文化課刊行島原市遺跡地図記入番号９の遺跡で，[註2]有明町に近接した中野川の左岸で，その水源地近くの段丘上西端に位置している。（水源地はその上部（西）500メートルの大杉神社）

2．遺跡の概要

昭和32年７月諫早水害の直後頃，当時の三会中学校生徒が，長貫において２個の「ハンドアックス」（握槌）を川原化した道路上にて発見，当時三会中学校に勤務中の大津益雄氏に提出した。昭和33年の春この石器を，来島した慶応大学考古学研究室におられた江坂輝弥教授がみて，旧石器文化の遺物であることを述べられた。

これを当時刊行の「島原半島の古代文化一概説と年表」[註3]の中で発表したことから，長貫は旧石器文化遺跡が存在するという認識が学界に知られ，広く紹介されるにいたり，[註4]昭和57年頃県文化課が改めて島原市の埋蔵文化財の分布調査を実施，上記の遺跡地として「周知の遺跡」となったのである。

3．調査の経緯

従来から現地で畜産を営む田浦一族が組合組織を結成して，牧場を大規模に経営する計画を立てたことから，別図に示す地区を緊急調査することになり，別紙の如き調査団を組織，昭和60年10月１日より同月25日までの25日間約300余平方メートルの発掘調査を実施した。

4．調査地

調査地にA，B，C，D，E，F，G，H，Ｉの各トレンチを設定，Aトレンチでは，２，５，７，９，11，13，Bトレンチでは，１，２，４，６，８，Cトレンチでは，０，１，３，５，Dトレンチでは，１，３，５，Eトレンチは，１，３，５，Fトレンチは，１，３，Gトレンチは，２，４，６，Hトレンチは，１，３，Ｉトレンチと各トレンチの発掘を実施した。

１～３地区に区分し，１地区にA，B，C，Ｉトレンチを，２地区にD，E，Fを，３地区にG，Hトレンチを図に示すように設定した。（トレンチ設定図，１～３）

5．地層の形成（写真図並に地層図）

地層の形成は至近路離でも異なり，１層は黒褐色の耕土であるが，２層はＡＴでは略々褐色の砂質を含む粘質土であり，３層は黒色火山灰土である。多くの場合軽石の小破片が小礫状に含み，４層は褐色粘土であり，その下は岩盤となっている。（ＣＴ―Ｏ地層図参照）

ＤＴでは，１，５の４層は(it も同じ)旧河床らしい砂土で，ＥＴの１の２層，３の３層の一部も同称であった。このように一ケ所毎に急変する地層の形成は，自然災害的土砂流の操り替えしがあった事実であり，中野川の川床と，１地点の高底差は約15メートルもあり，更に現地の南西約200メートルの地は，更に５～７メートルの高さを持つ台地となり，遺物の散布は濃厚となる。図に示した石器の大部分は上部各地での採集品である。

要すれば，中野川と現在形成されている谷合地の渓谷をなす一部が調査現地で，発掘により発見された遺物は，即ち上部からの流入物であった訳で，この地の地層の形成と深い因果関係の上で考えなければならない。

6．遺物（実測図並に写真図）

遺物の主体は，縄文文化早期の押型文土器文化のものであり（75，182，198―１，198―２，222―１，222―２，90，92，82，88，81，100，97，85，200，78，158，109，170，81，101等）これに次ぐものとして，比定できる前期前葉の轟Ｂ式土器は，条痕の器面調製であり，172，37，166等は，それとみられるものの余りにも細片で決定しがたいものがある。

中期の代表的なものは阿高式土器系で，（152）島原半島の高地では余りみないのであるが，海岸低地遺跡では以外と多い土器である。[註5]後期の遺物としては，160の三万田式の黒色研磨土器が１片発見され，晩期的では93の凸帯刻み目文土器が出土し，これは，この地の上部礫石原[註6]で多く発見されている。

石器の面では，222の打製石斧[註7]の採集が近くで得られ，近くに農耕生産の縄文後晩期遺跡の存在を教えるものである。長貫遺跡の中でも本調査地は，中野川が渓谷を削り谷合を流れる小流に面する傾斜地で遺構のないことは当然で，生活跡としても立地条件を備えた地でないことは地形的にも歴然たるものがあり，旧石器の遺跡としても近接地を研究の対象として将来進められなければならないだろうが，早急であらねばならない。

7．問題点

Ａ．組織痕土器（写真図，39，40）

本調査において発見された押型文土器は，平底であり，（75，182，但し182は近くでの採集品）隣町有明町森岡遺跡[註8]出土のものと同様であるが，長貫発見の２例は（75，182）底部にアンペラ状の組織体編物状の圧痕がある。土器に残こされた組織体圧痕のあるものは，多くは縄文晩期頃からで，[註9]例外的に島原市三会下町海中干潟遺跡において，縄文中期土器に布痕土器の出土例があった。[註10]本調査による75，182の資料例は，画期的な発見であり，[註11]この地域の将来の研究に期待

されよう。尚本調査に関し文化財保護法上屈出書類提出の期日と着手の期日の問題，調査終了と工事着工との問題等関係行政機関内に見解の相違，提出書類と調査の種別的問題等の，判断の異なりが見受けられた。保護法は法律であり施行法で定められている事以外適宜の判断は許されるべきでなく，文化財保護法の制定の趣旨保護の確立を関係者は計るべきである。またＡＴの13において土鈴片が出土した。これは，あきらかに土師器であり，長崎市深堀出土のものと同形とみられ[註12]仏教文化が逸早くこの地に及んだことを示すものである。[註13]

Ｂ．土鈴の出土（写真図53～55，実測図36）

製理番号36は土鈴の破片である。この遺物の出土地点は，トレンチ設定区の１で，１トレンチの13出土であるが，このトレンチ内の地層は相当乱れており，（各トレンチ断面図ＡＴ―13（ｎ）参照）土鈴は３層出土である。当然流土の堆積内であったが，問題点は出土地点や地層ではなく，土鈴という物自体が，如何なる理由によってこの地に出土をみたのかという点である。

古墳文化期終末頃に仏教の伝来を示す多くの資料があり，土師式焼成のこの土鈴も，その頃に当たるものと想定され，大陸文化の上陸点の一つがここであったという仮設の設定も可能で，装飾古墳を主体とする有明海文化の発生や，定着も恐らくこれ等の大陸渡来文化を主としたことが考えられ，航海文化が有明海の沿岸に上陸する地点の一つを想定する資料でもあり，縄文晩期文化の狸山の支石墓，有明町甘木の支石墓，（長崎県南高来郡有明町，昭和60年12月調査）吾妻町錦戸墓地の支石墓，（「島原風土記１号」記載古田）小長井町井崎支石墓（長崎県遺跡地名表），対岸熊本県の支石墓，（松尾禎作「北九州支石墓の研究」昭和32年９月10日）等大陸より渡来した文化の上陸地を位置づけていることと同様，土鈴もまた資料的には上記と遜色ない資料であり，注目されなければならない。

８．結び

本調査の対象となった地域は，旧島原と三会の境をなし，西から東流して有明海に流入する中野川（押図第２図参照）の南岸に位置し，上部の礫石原[註16]（遺跡地で終戦後の開拓地）台地より油堀，山寺と景華園に続く突出した台地地形の北側で，中野川に向って傾斜する地形であり，遺物の包含層もまたそのような地層の中で，流出した流出物であることを示していた。従って調査地の南側は丘陵地の（約200ｍの所）背後に当たり，遺物も恐らく雨水，出水等に，その傾斜によって流れたものとみられ，遺跡の本体はここに求められるものであろう。調査地の南200ｍの地点で標高129ｍであるが，約１㎞の西方では約160ｍの標高をもったこの台地では，上は礫石原を頂点に下は景華園に至るまで遺物の散布が認められ，将来早急にこの台地上の調査研究によって，各文化期に基く遺跡の立地分布を確実にする必要があり，この地発見縄文前期の組織文土器，三会下町海中干潟発見縄文中期布痕土器は，この台地上の一連の組織文原体の存在を窺がわせるものであり，鳥浜貝塚では既に現物の存在が確認報告され[註14]年代は降るとしてもこの下部の景華園では弥生文化の布が発見され，[註15]当時としては画期的発見であり，学界の注目を集めた因縁の遺跡でもあり，こちらと関連は直接ないにしても，その本質を明らかにする必要があろう。

註　解

1．古田「礫石原（くいしばる）遺跡」，百人委員会埋蔵文化財報告第７集，1977年２月

2．市内各関係機関，関係業者等に配布済

3．宮崎一章，古田，上田俊之，昭和37年９月15日発行島原観光社刊

4．長崎県教育委員会刊，「長崎県遺跡地名表」，長崎県文化財調査報告書第１集，昭和37年８月，筆者等も参画

5．古田「島原市の海中干潟（図録）」，百人委員会埋蔵文化財報告２，昭和49年１月，（島原市三会下町海中干潟に多く発見されている）

6．前出１

7．古田「縄文晩期の農耕石器―概説と図集」，国見高等学校社研部報10，昭和48年１月

8．前出４

9．鏡山猛，「原生期の織物―九州の組織痕土器を中心に（上，中，下）」史淵84，86，89輯昭和36年５月（上），昭和36年（中），昭和38年１月（下），古田，「縄文文化晩期に現われる布痕土器」，昭和35年９月野鳥文化12号，古田「組織文土器と縄文晩期の文化航路」島原史学研究発表要旨，昭和37年５月

10．前出５

11．鳥浜貝塚遺跡では縄文前期に布が発見されており，「鳥浜貝塚報告」組織体は資料的に不足しているとはいえ，案外縄文文化の早い時代からあったことを考えてよいのではないか。参考資料，古田，上田俊之，「縄文文化の新形式（島原半島における）」野鳥文化７，（山ノ寺，百花台，小浜，狸山出土々器）昭和35年４月，鏡山猛「原生期の織物―九州の組織痕土器を中心に（上，中，下）」，史淵84輯，同86，89輯，昭和36～38年，九州大学九州史学会

12．長崎大学医学部解剖学第二教室「深堀遺跡」（人類学考古学研究報告第１号），1967，この調査時に出土，同教室保管

13．鈴は，印度では眠れる男神を，女神が鈴を鳴らして眠りから覚さすものとされ，日本にこの習が入って，神殿の前にさげられ，参拝の時鈴を鳴らして神を呼ぶとされている。

14．前出11

15．島田貞彦，「甕棺内新出の玉類及布片等に就て―肥前国南高来郡三会村遺跡―」，考古学雑誌21―８，昭和６年

16．日本考古学協会西九州総合特別委員会，「島原半島（原山，山ノ寺，礫石原及び唐津市〔女山〕）の考古学的調査」九州考古学10，14，昭和35年10月25日，昭和37年３月15日

長貫遺跡調査団組織表

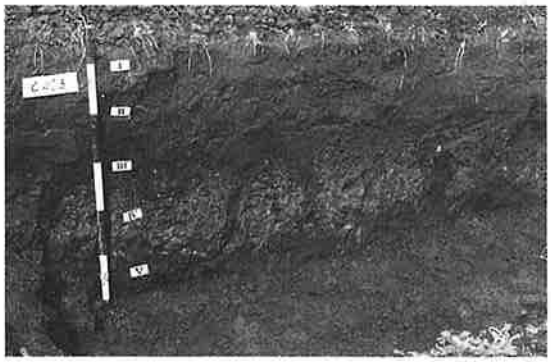
団　長	園　田　秀　利	（島原市教育長）
団　員	吉　田　安　宏	（島原市文化財審議委員）
〃	中　山　春　男	（市社会教育課長）
〃	三　原　義　男	（前教育委員会勤務）
〃	川　崎　清　弘	（市社会教育係長）
〃	谷　口　博　信	（市農林水産技術吏員）
発掘担当者	古　田　正　隆	（日本考古学協会会員）

写真図(1～56)

1．対岸より現地を望む（西より東に向って）

2．Dトレンチ東端より1地区

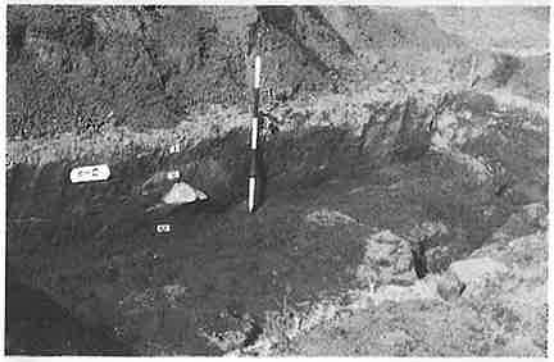
3．BT―2（地層）



4．CT―5（地層）

5．CT—3（遺物出土状況）

6．BT—6（遺物出土状況）



7．BT—2（地層の乱れ状況）

8．AT—7（遺物の出土状況）

9．対岸（西）より現地

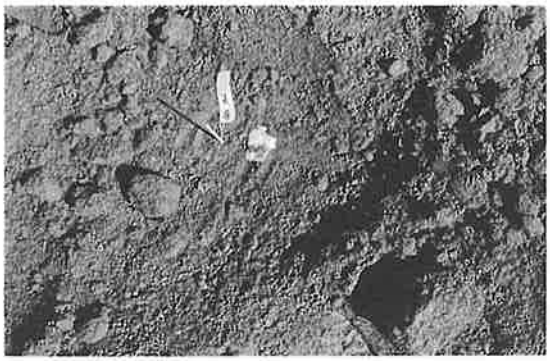
10．対岸（西）より現地（中は中野川）

11．対岸（西より東に向って）より２地区

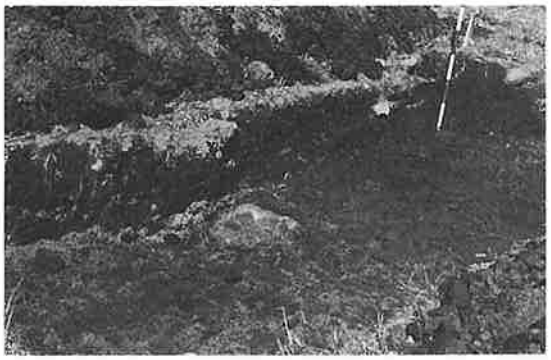
12．現地（西より東に向って）

13．２地区の発掘風景

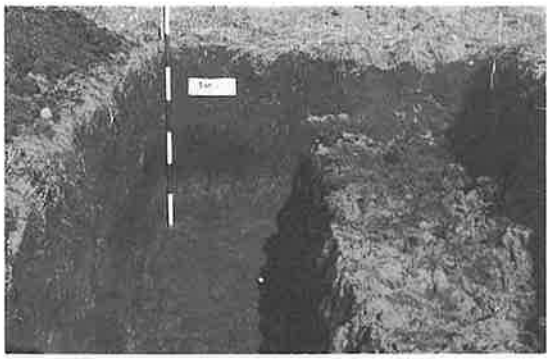
14．２地区（南西台地より）



15. AT—7（4の出土状況）

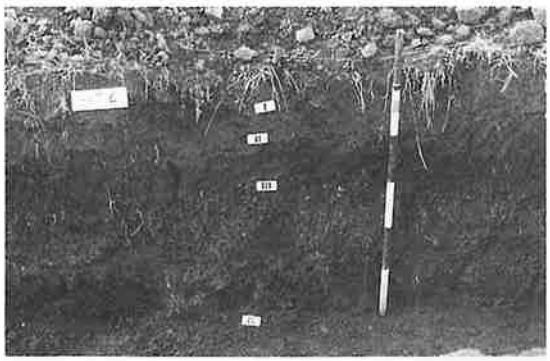


16. AT—2

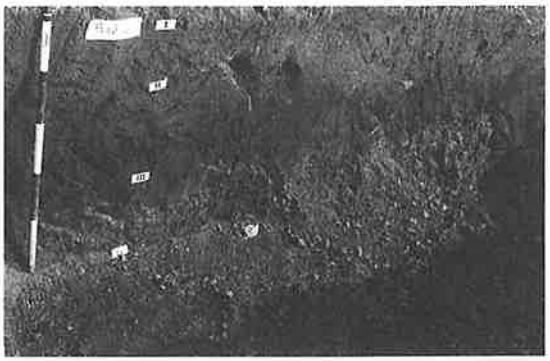


17. AT—11（地層）

18. BT—4



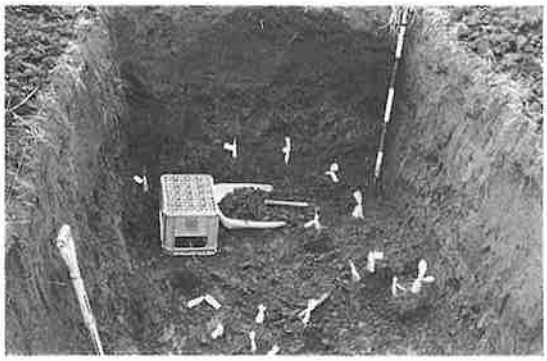
19. BT—8



20. BT—2

21. CT—2

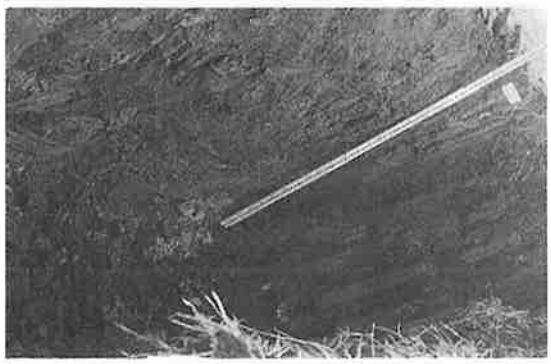
22. CT—3



23. CT—3（遺物出土状況）

24. CT—3（遺物出土状況）

25. CT—5



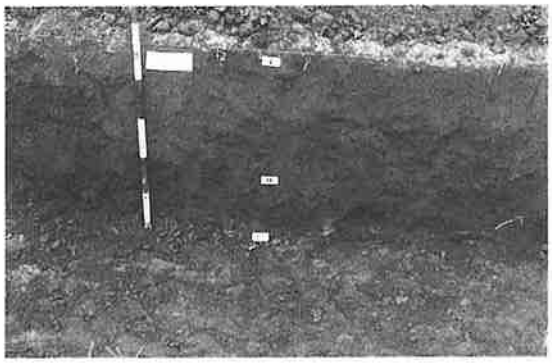
26. CT—0

27. DT の発掘状況

28. DT—1

29. DT（152の出土状況）

30. ET—3



31. ET—1（地層）

32. FT—5（傾斜の状況）

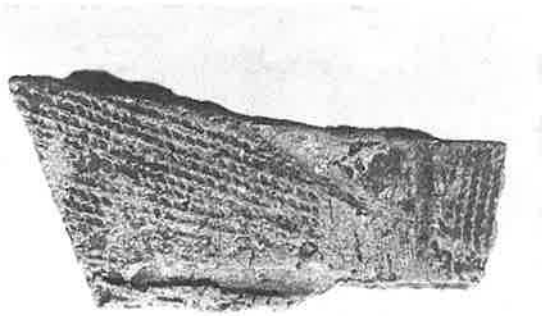
33. 62, 93, 160, 16　下は152

34. 33図の裏

35. 上段108, 169, 12　下段176, 66, 185

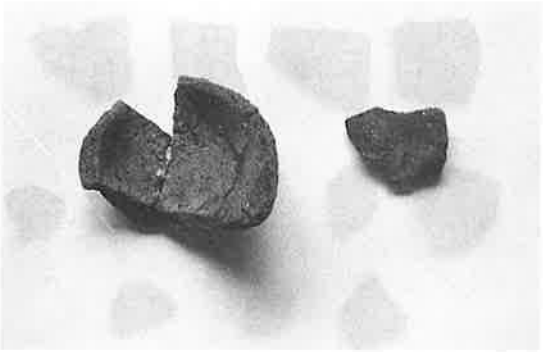
36. 35図の裏

37. 206—1

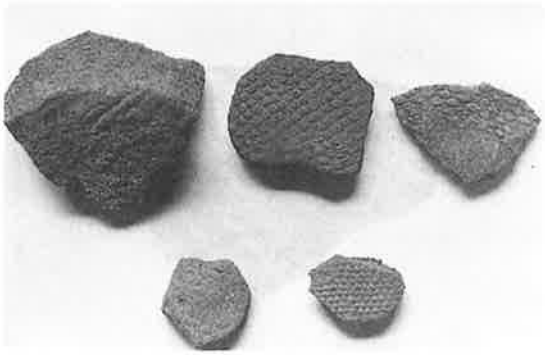


38. 203

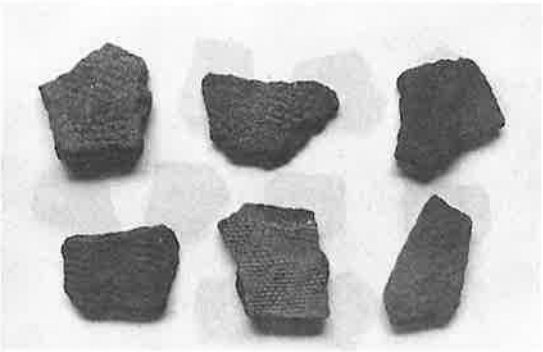
39. 73, 28



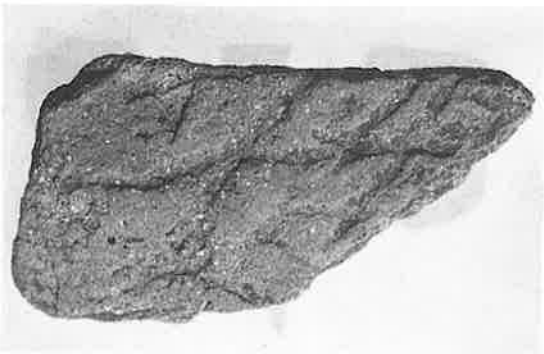
40. 39図の内面



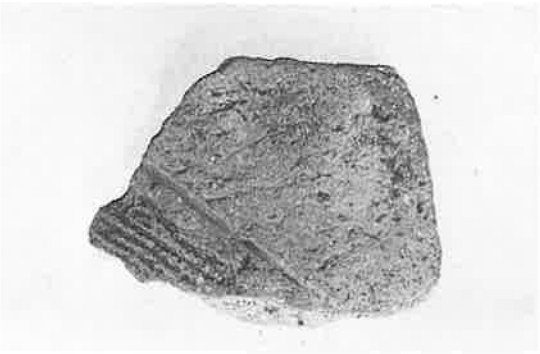
41. 上段182, 198—2, 222—2　下段170, 78



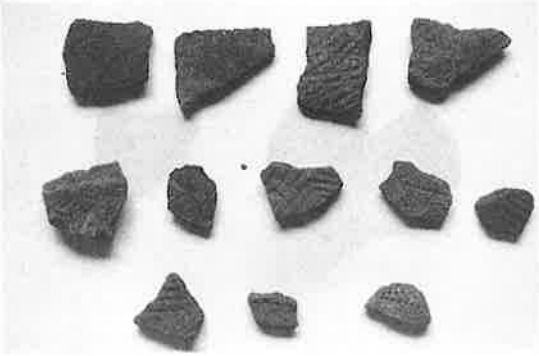
42. 上段90, 82, 191　下段172, 92, 97



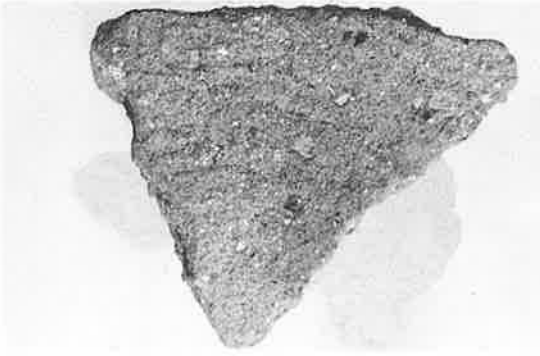
43. 228



44. 206—2

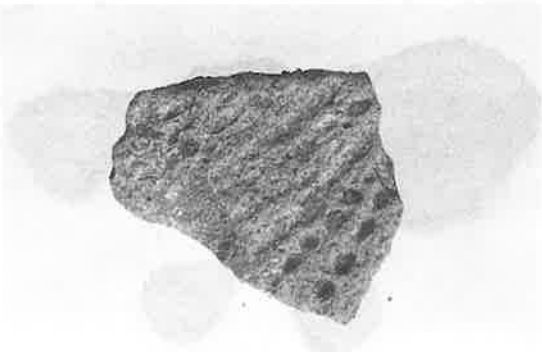


45. 上段31, 52, 166, 91
中段141, 187—2, 165, 91—1, 91—2



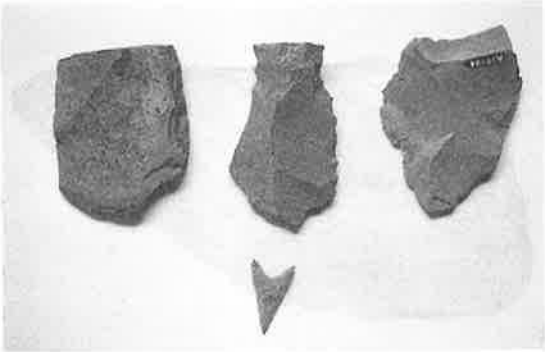
46. 28

47. 上段81, 100—1, 158, 100—2
中段88, 170, 85, 82



48. 203

49. 169—1



50. 上段178, 105, 24　下段64

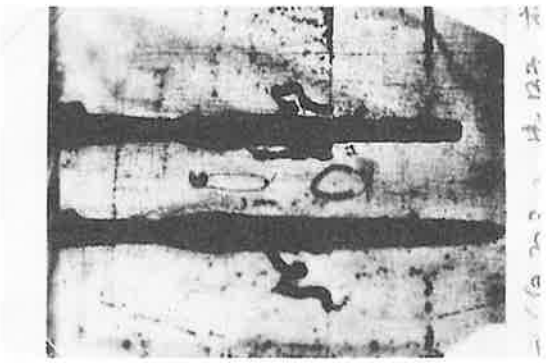
51. 222

52. 223

53. 36の土鈴片

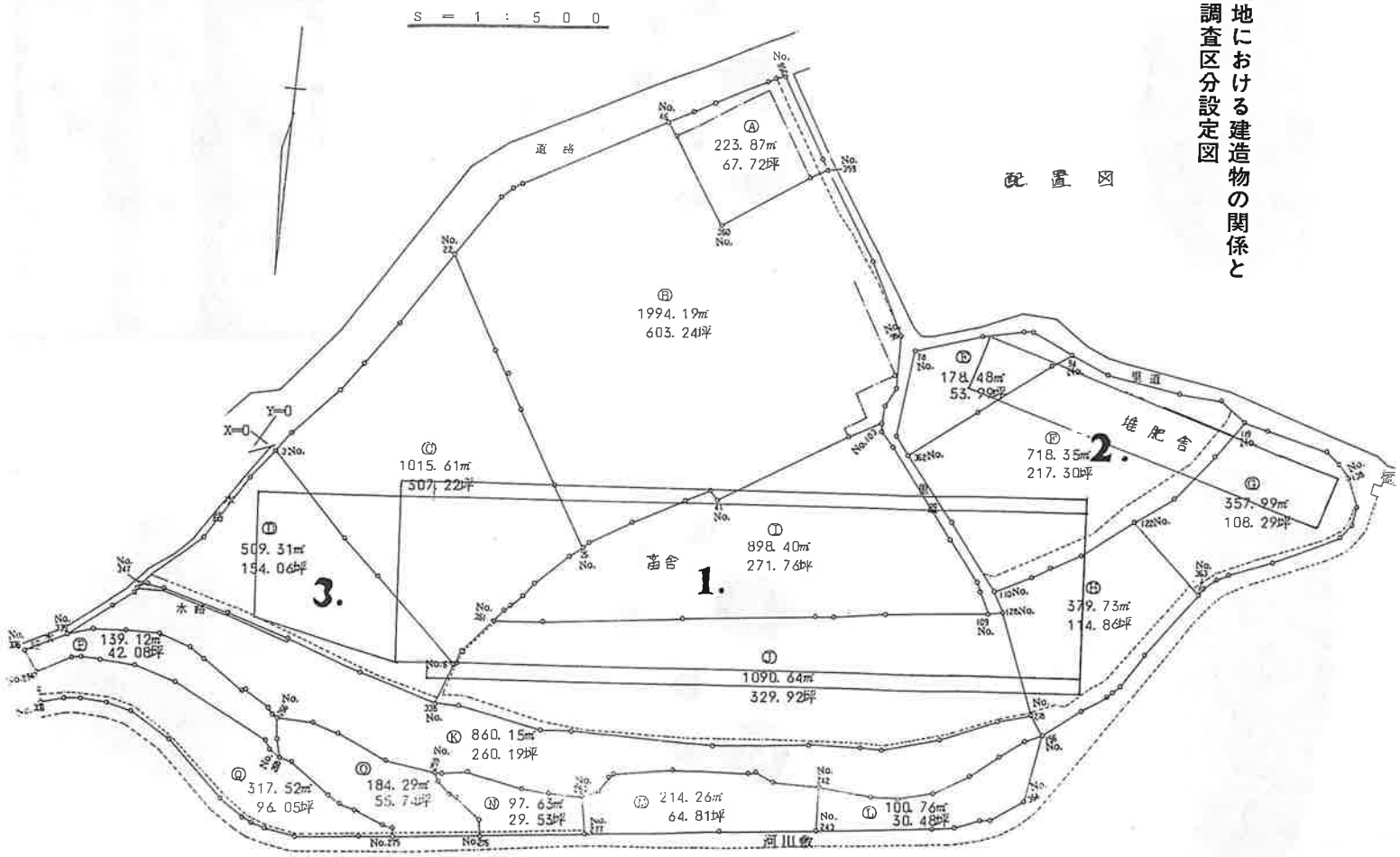
54. 左同

55. 深堀出土土鈴



56. 景華園出土布片（銅鉾，玉類は布片の上においてある）浜口叶氏提供

現地における建造物の関係と調査区分設定図

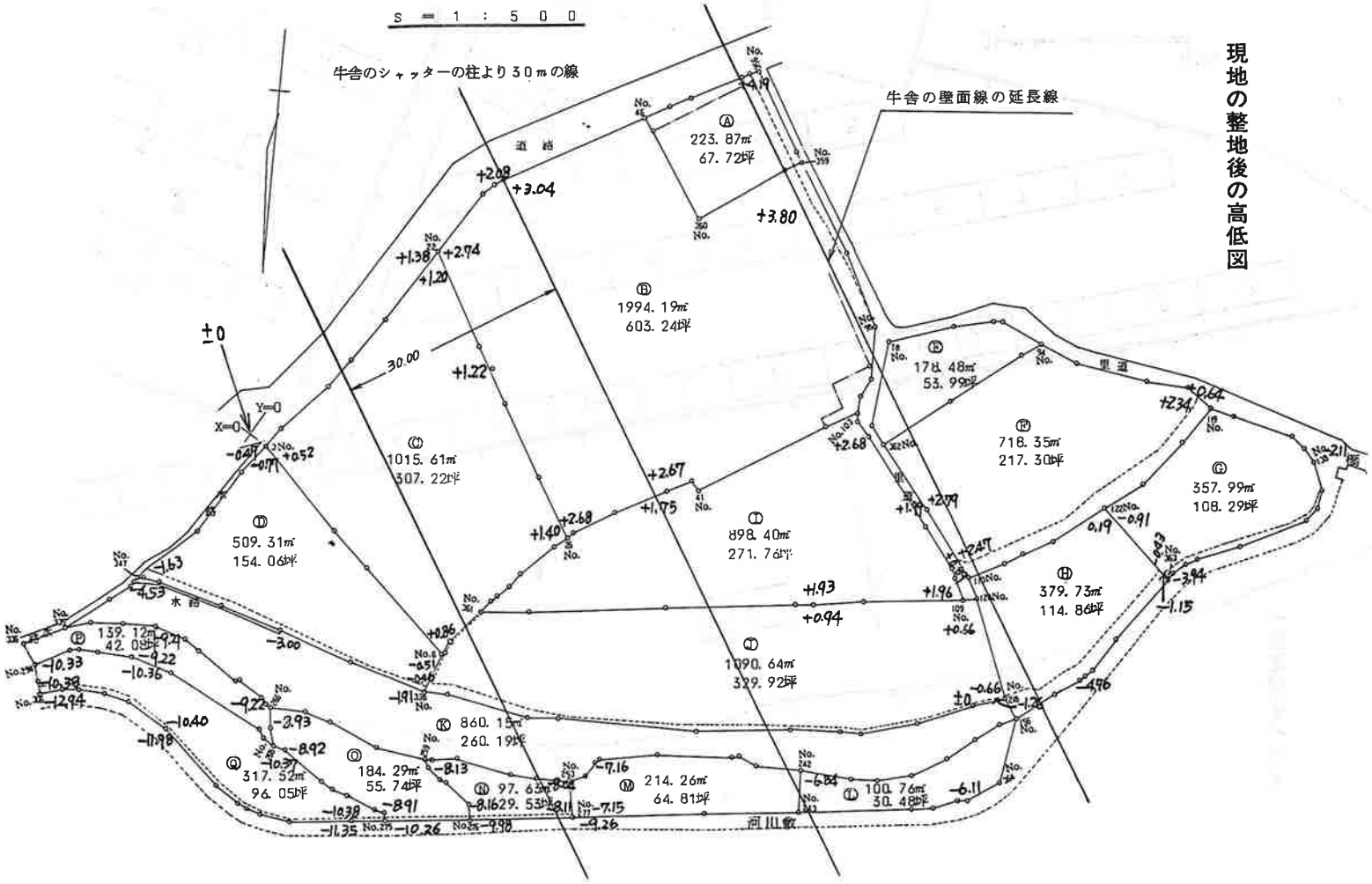


※赤い数字はX=0　Y=0を基準にした時の高さを示す。

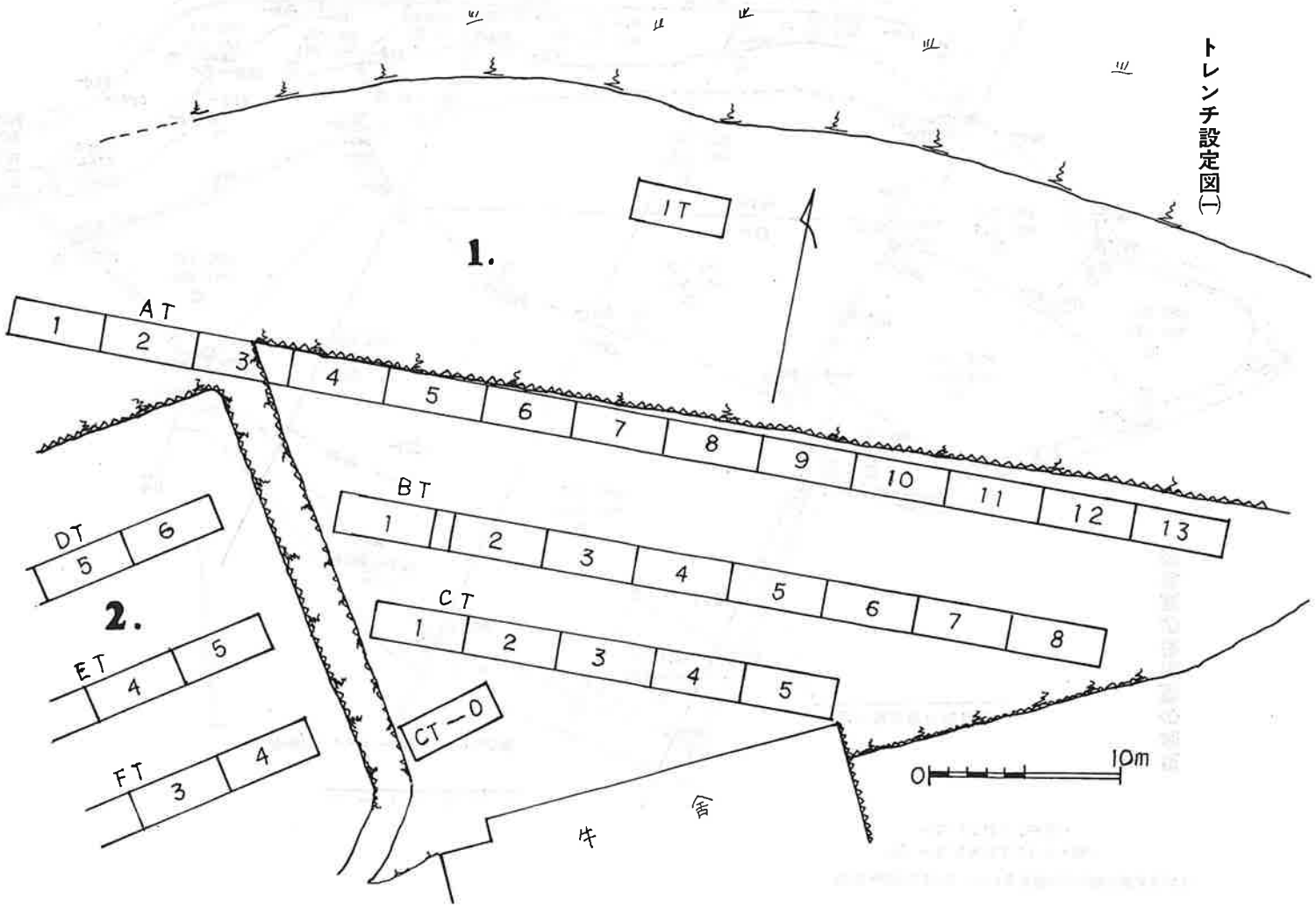
（例）＋2．08は2ｍ08㎝高い

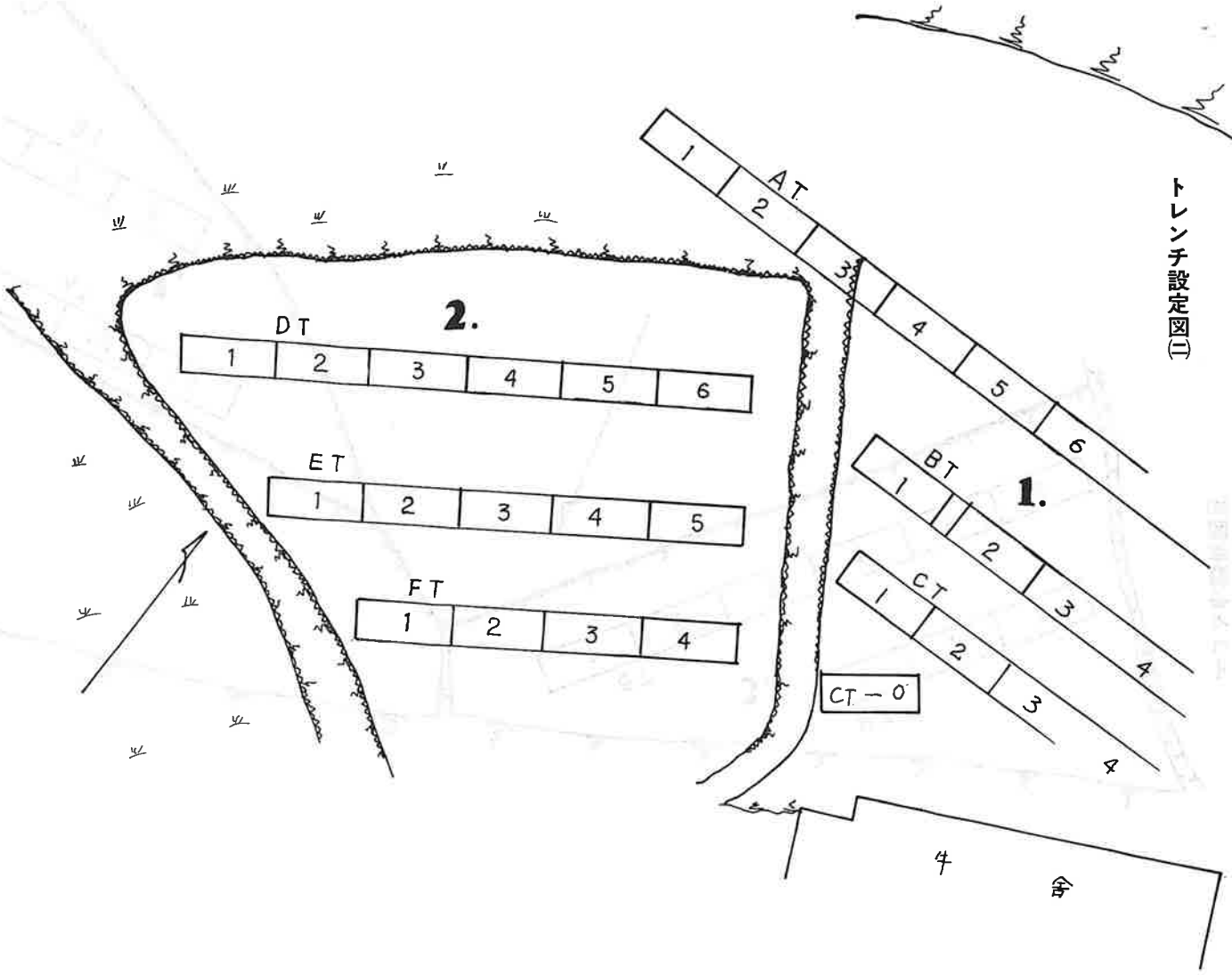
　　－0．47は47㎝低い

現地の整地後の高低図

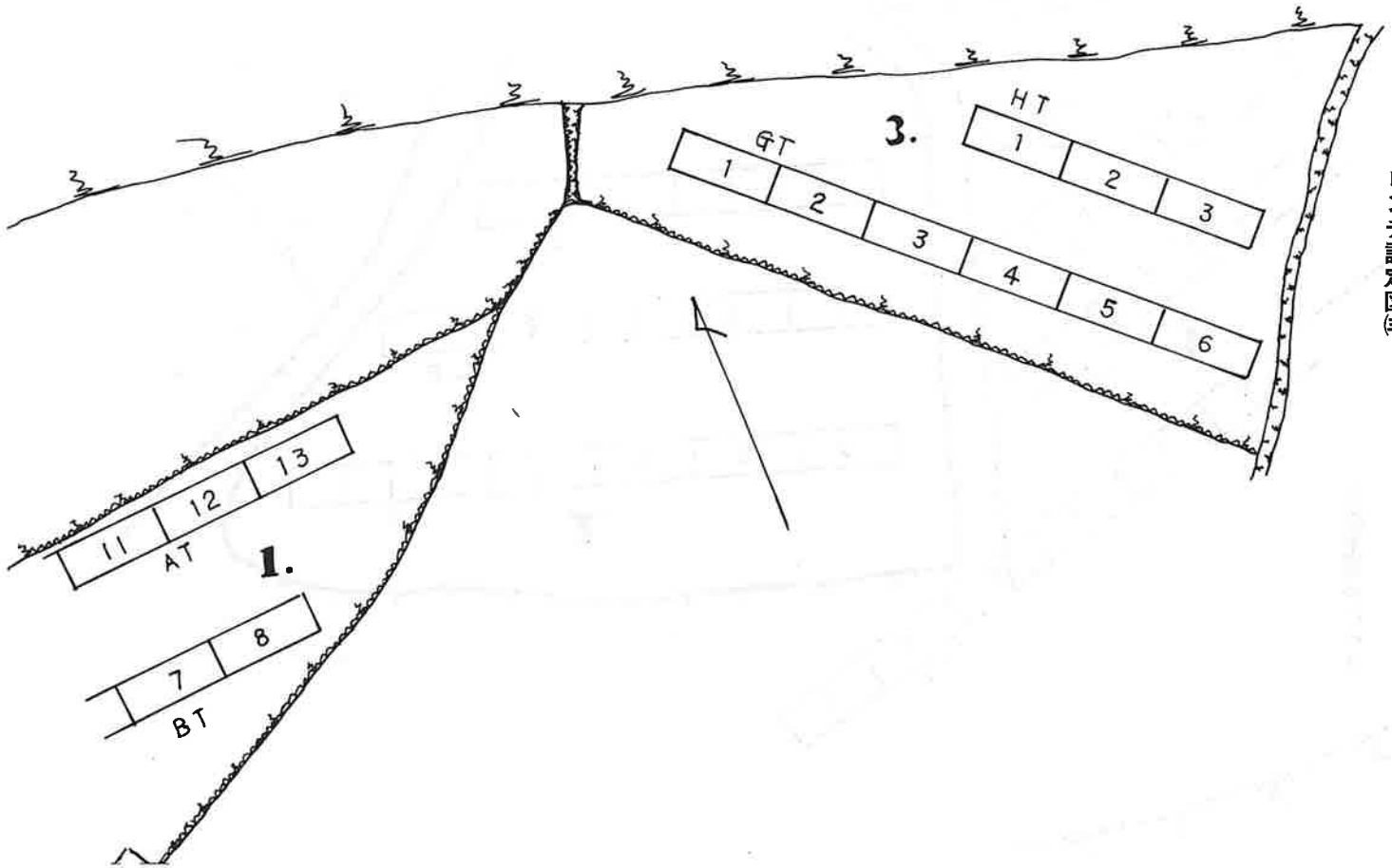


トレンチ設定図(1)

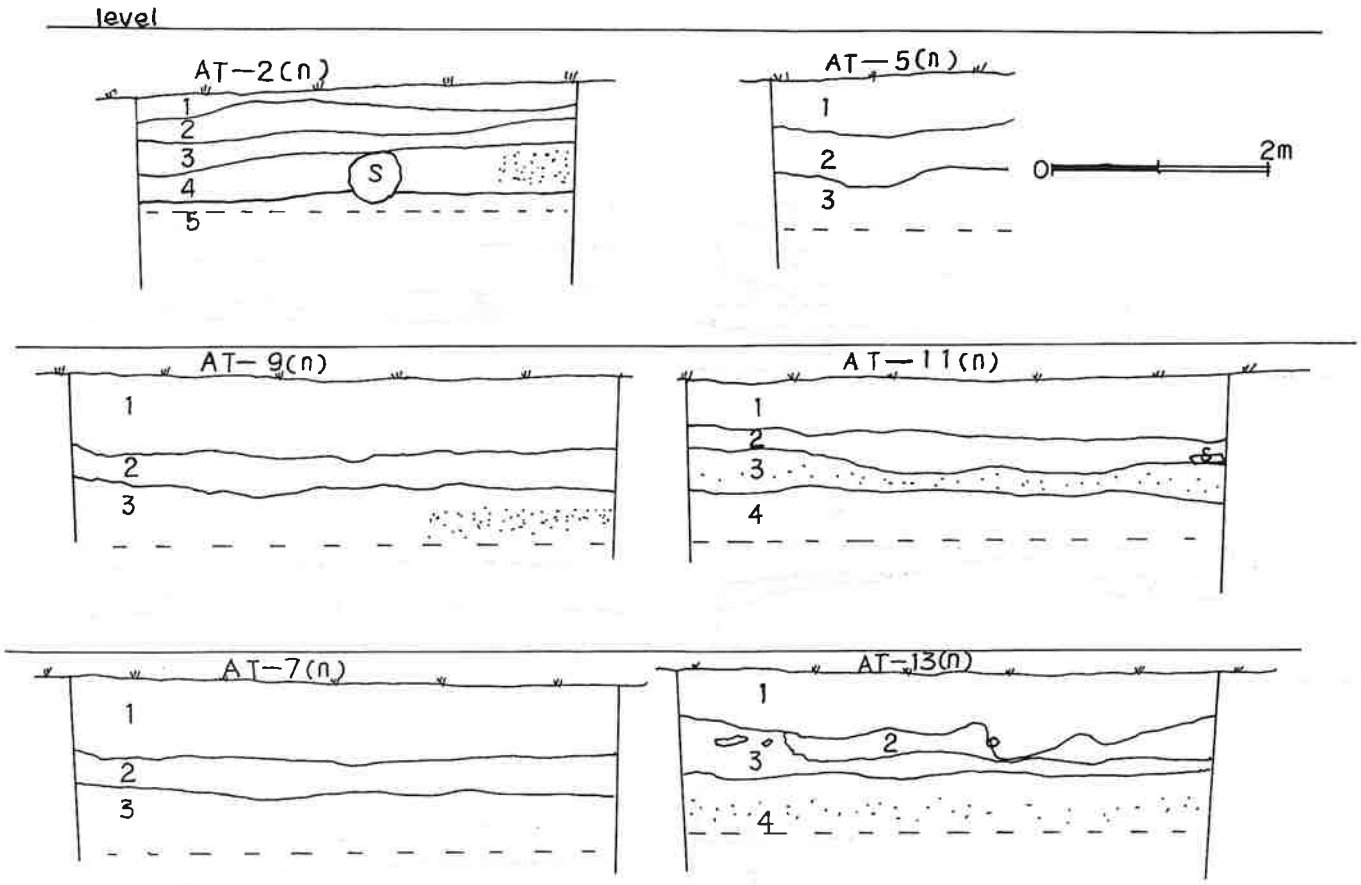

1.
1T
AT
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
BT
1
2
3
4
5
6
7
8
CT
1
2
3
4
5
CT－0
DT
5
6
2.
ET
4
5
FT
3
4
牛舎
0
10m



トレンチ設定図(二)

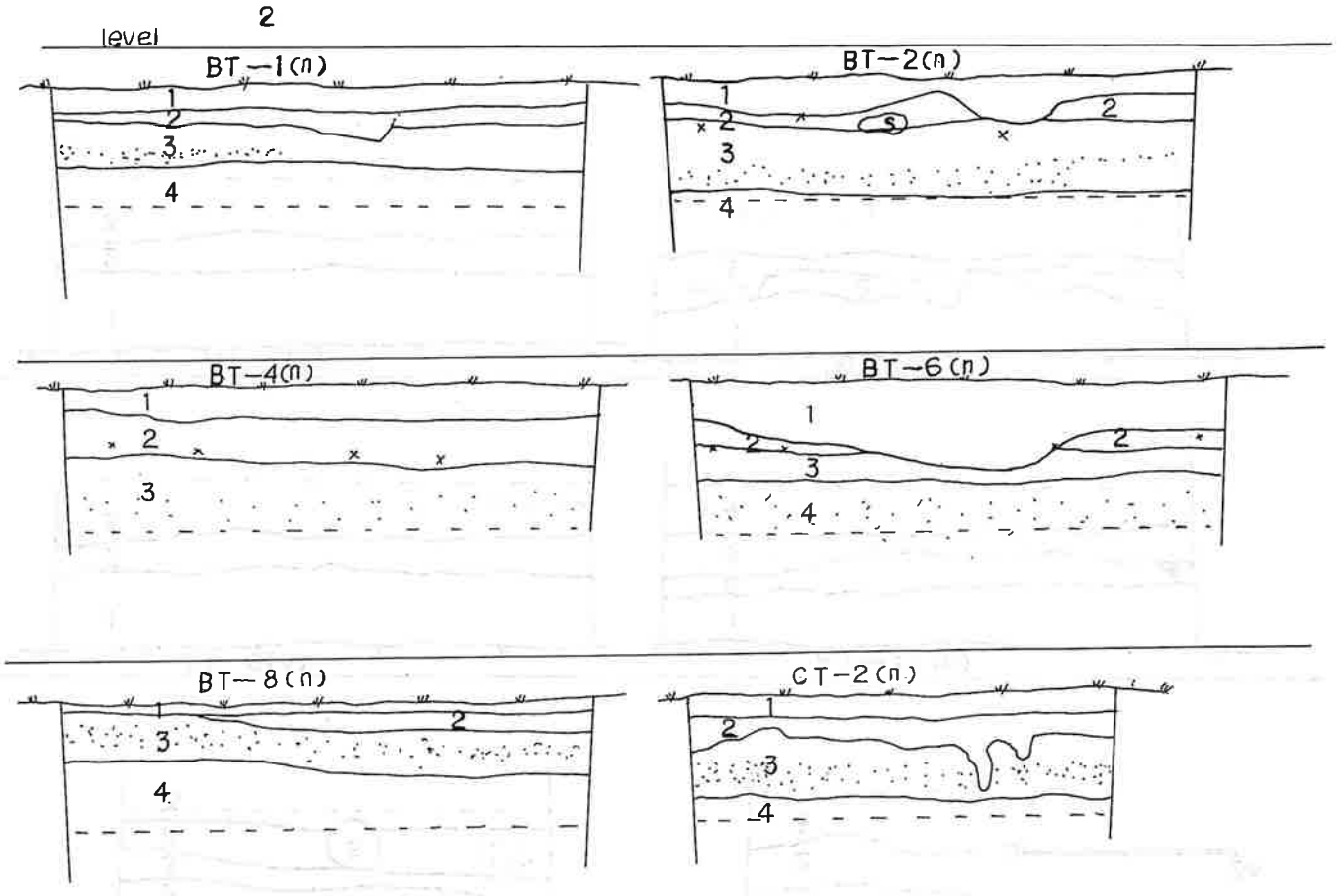


トレンチ設定図(三)

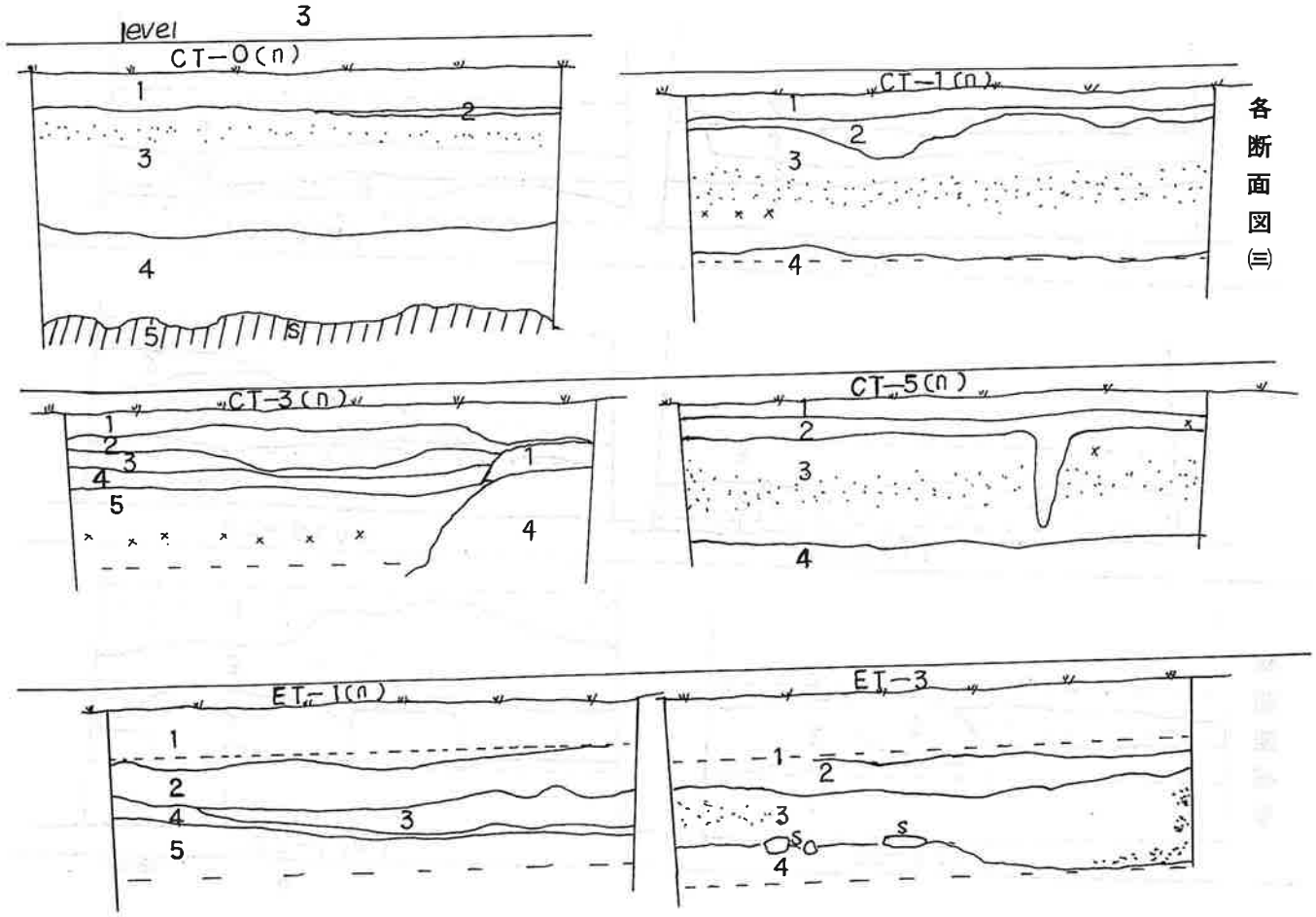

level
AT−2(n)
1
2
3
4
5
S
AT−5(n)
1
2
3
0
2m
AT−9(n)
1
2
3
AT−11(n)
1
2
3
4
S
AT−7(n)
1
2
3
AT−13(n)
1
2
3
4

各断面図(一)

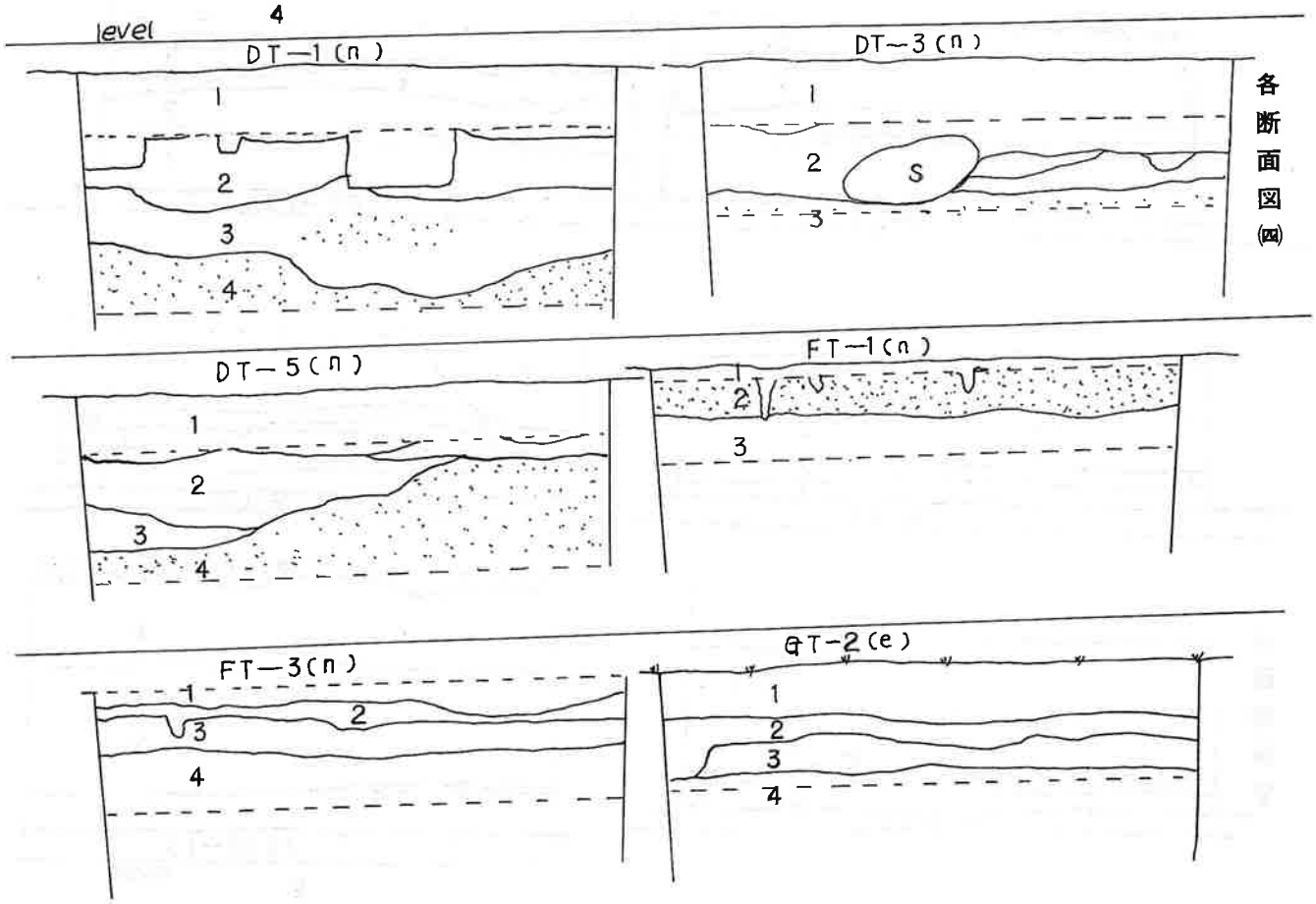
各断面図(二)

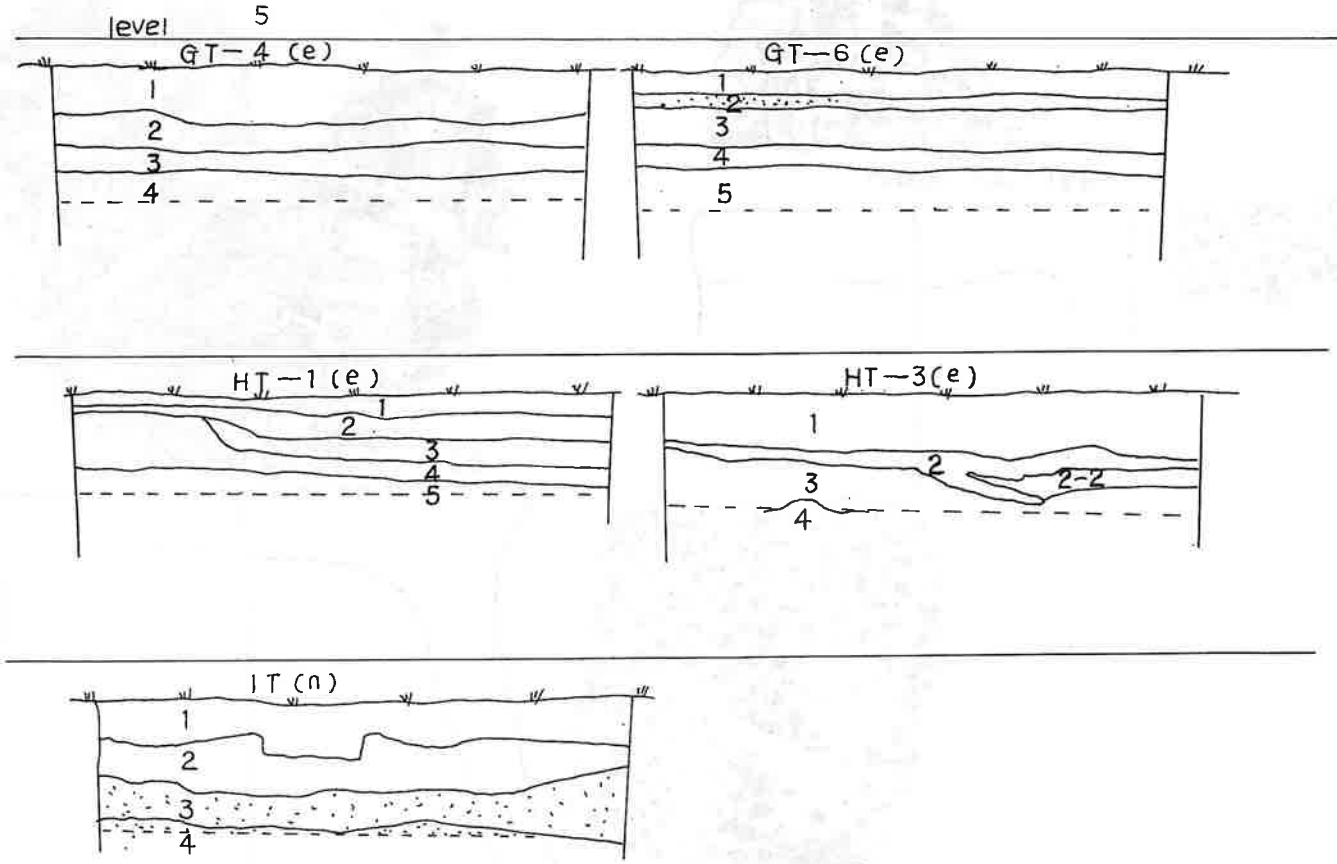

level
2
BT—1(n)
1
2
3
4
BT—2(n)
1
2
S
2
3
4
BT—4(n)
1
2
3
BT—6(n)
1
2
2
3
4
BT—8(n)
1
2
3
4
CT—2(n)
1
2
3
4

各断面図(三)


level
3
CT−0(n)
1
2
3
4
5
S
CT−1(n)
1
2
3
4
CT−3(n)
1
2
3
4
5
1
4
CT−5(n)
1
2
3
4
ET−1(n)
1
2
4
3
5
ET−3
1
2
3
S
S
4

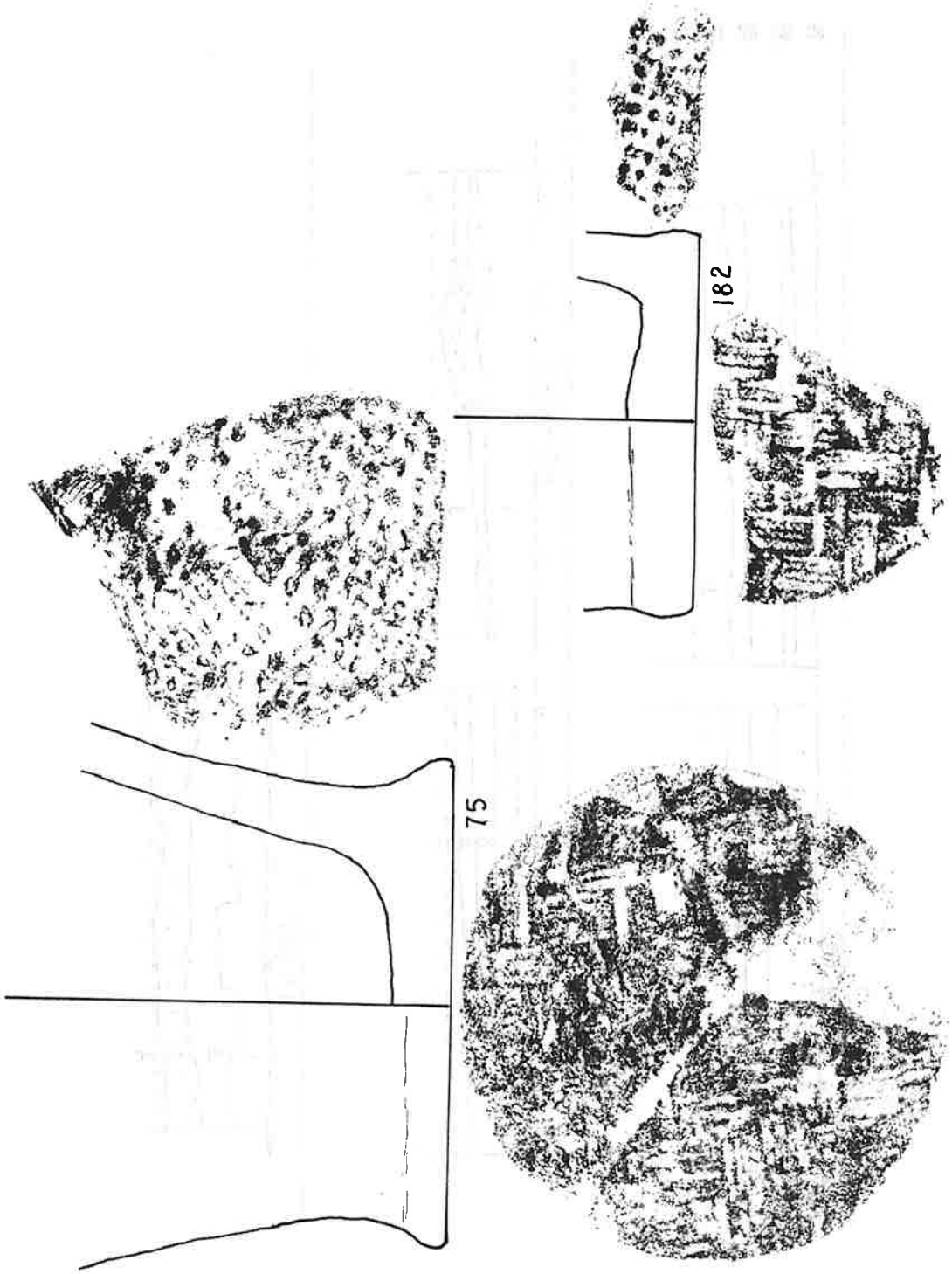
各断面図(四)

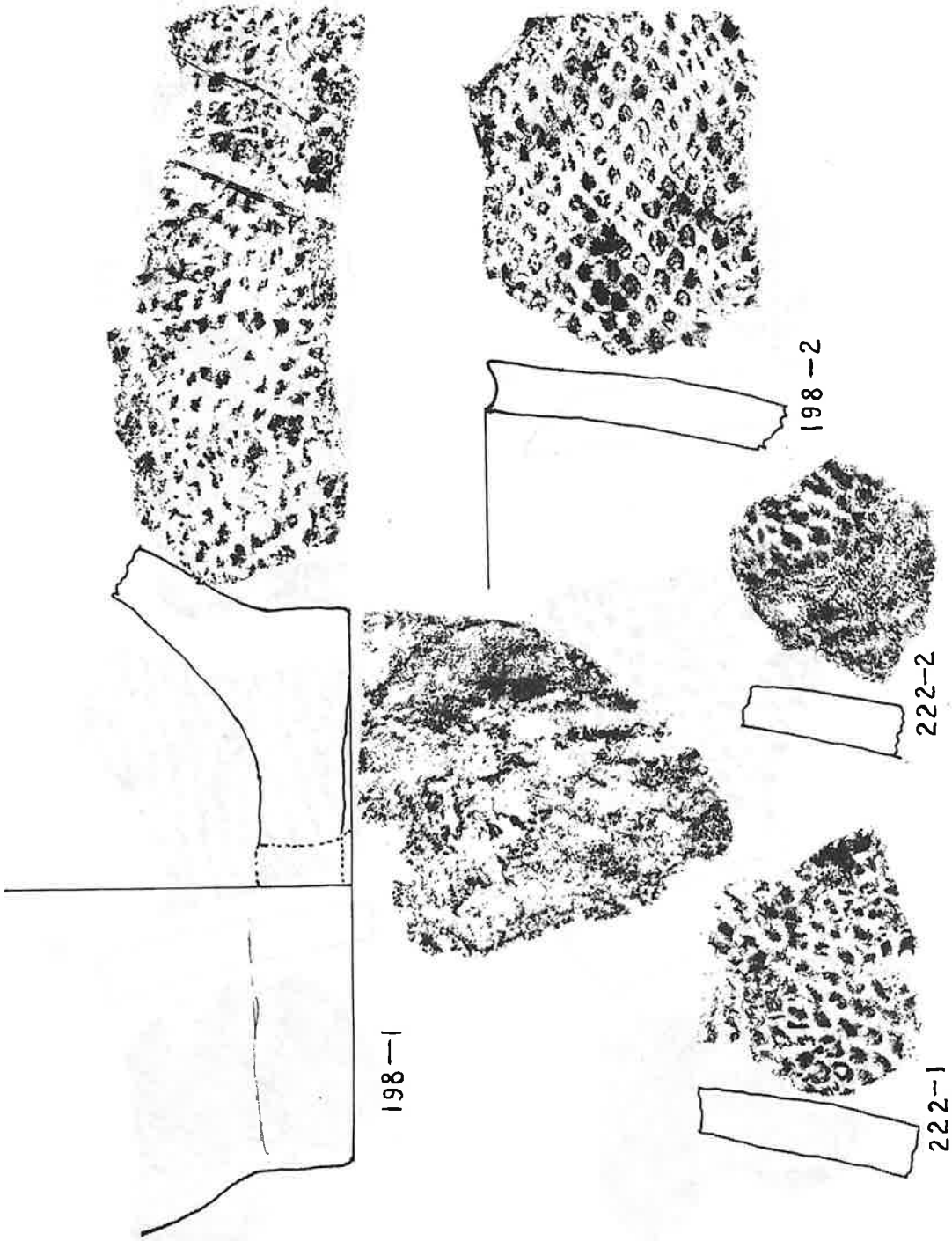

level
4
DT—1 (n)
1
2
3
4
DT—3 (n)
1
2
S
3
DT—5 (n)
1
2
3
4
FT—1 (n)
2
3
FT—3 (n)
1
2
3
4
GT—2 (e)
1
2
3
4

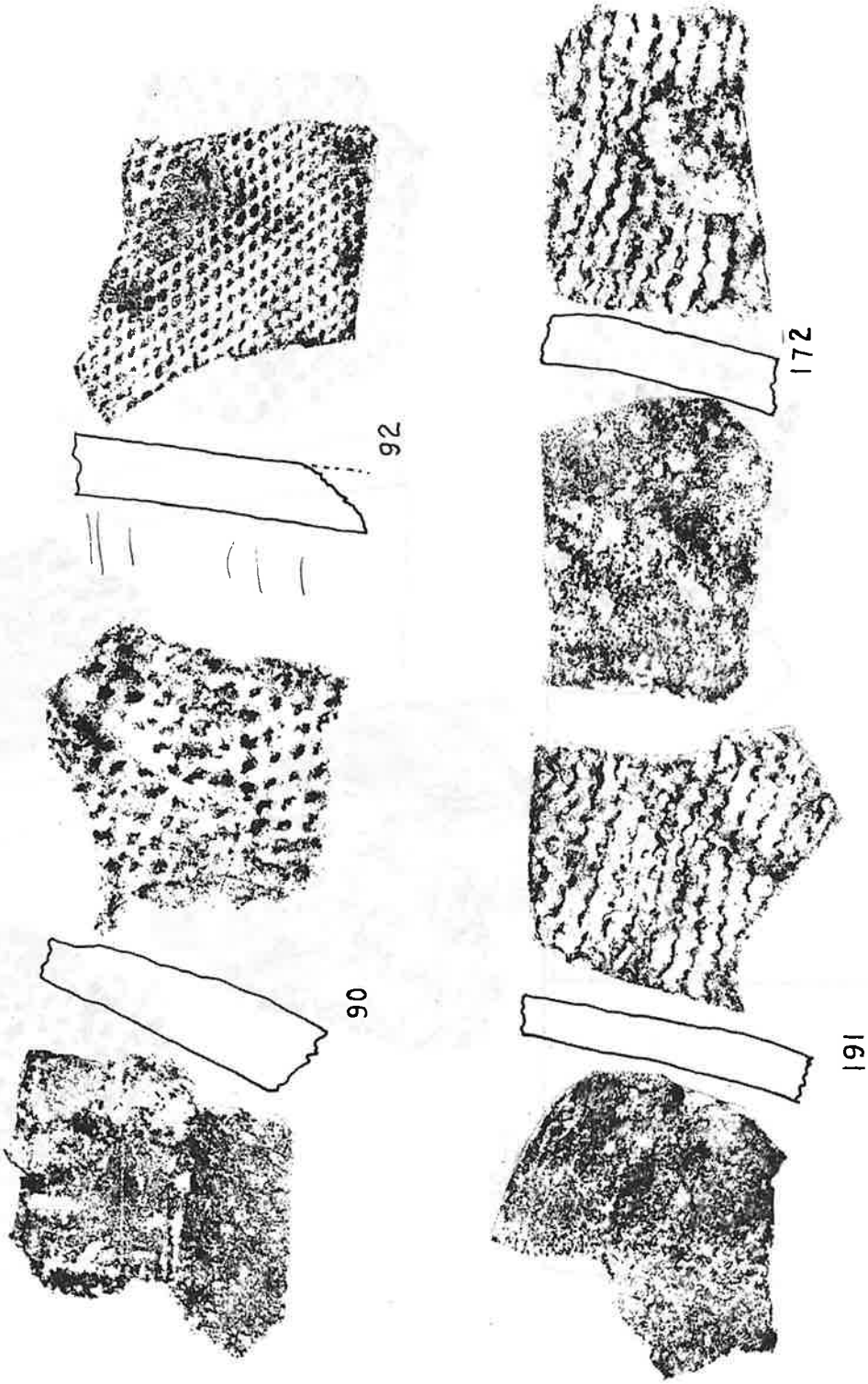


各断面図(五)

土器実測図



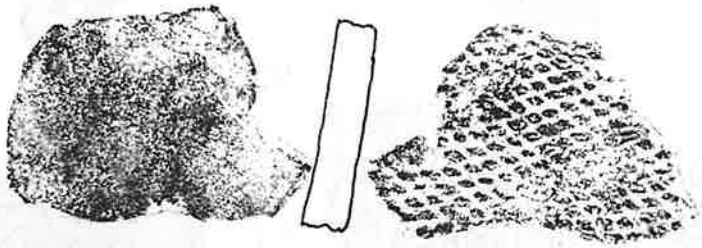

198—1
198—2
222—1
222—2


90
92
161
172

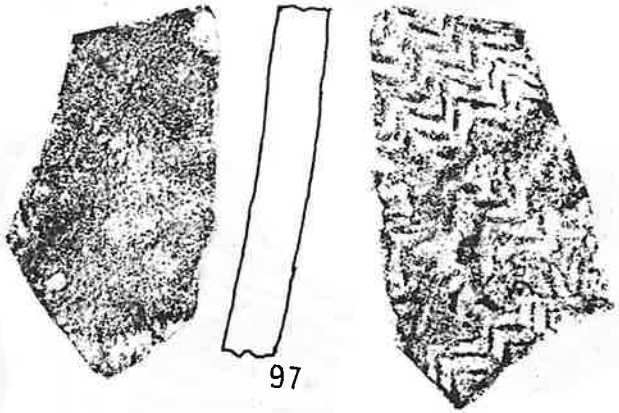
82

88

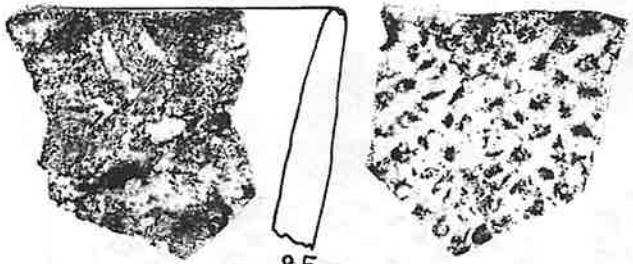
81



100

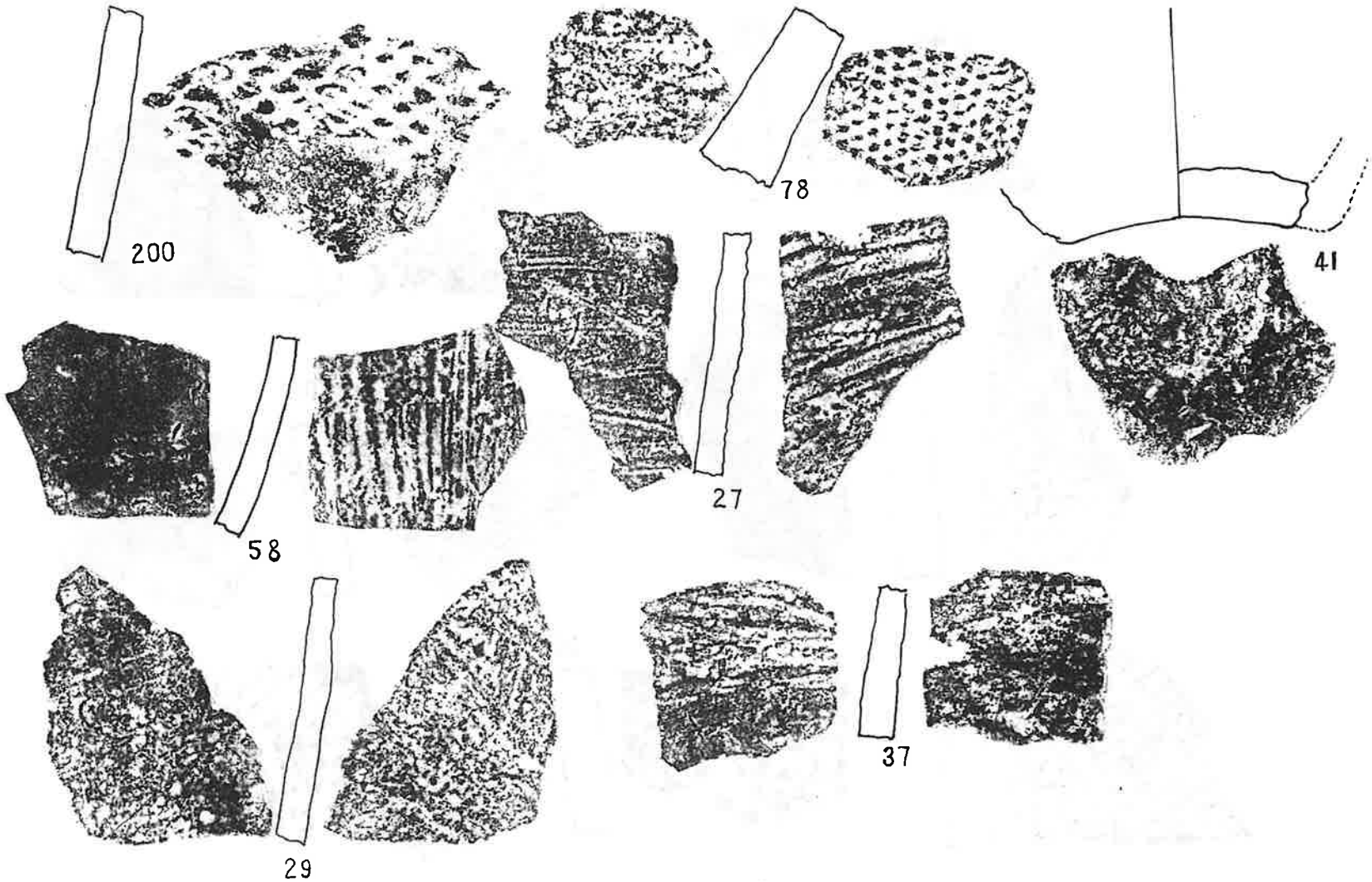


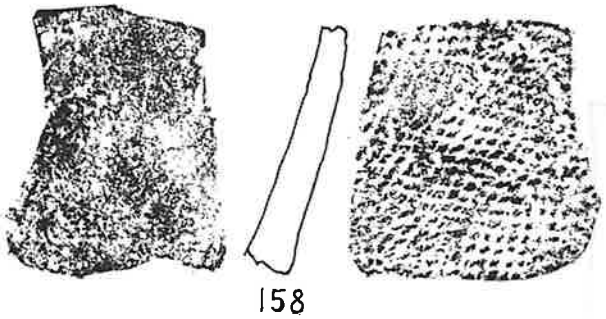
97

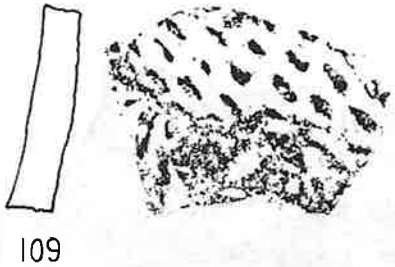


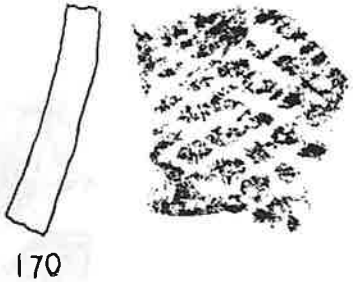
85

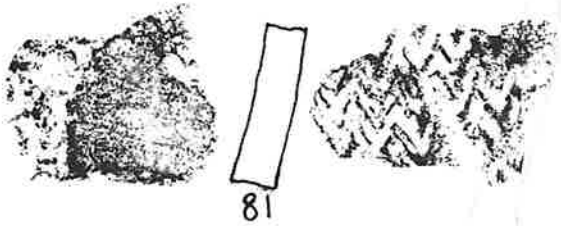
82

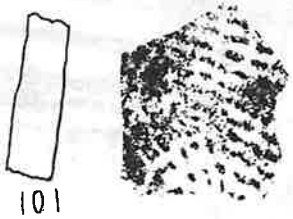

200
78
41
27
58
29
37

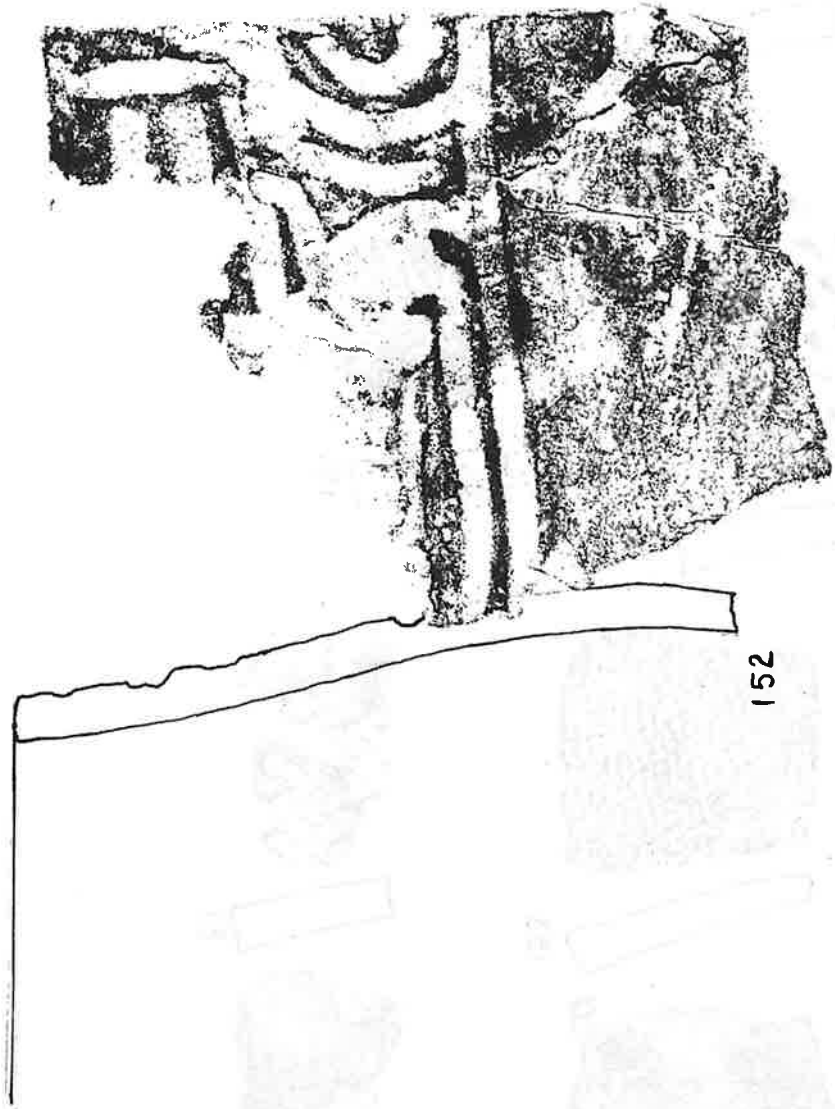

158

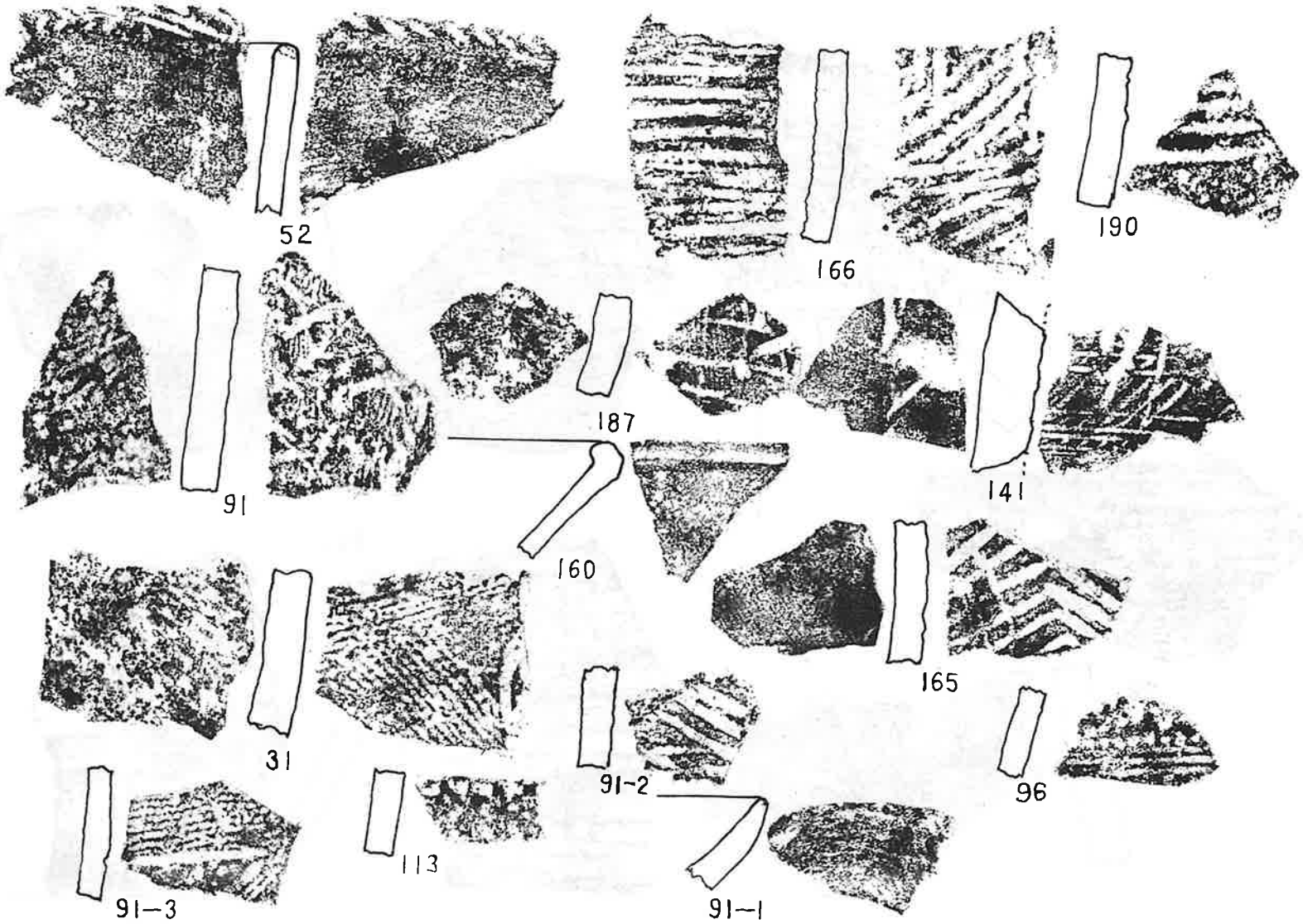

109

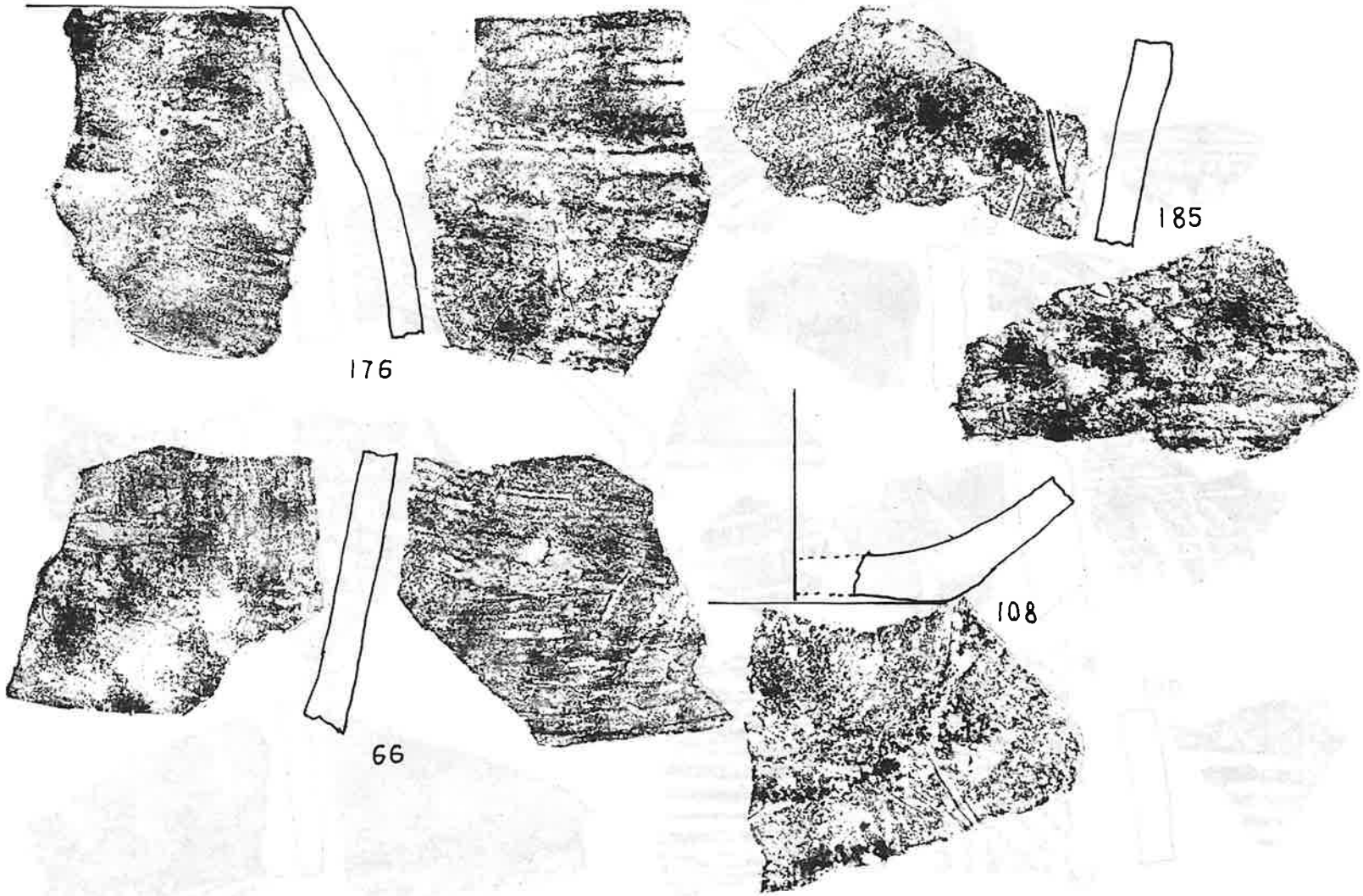

170

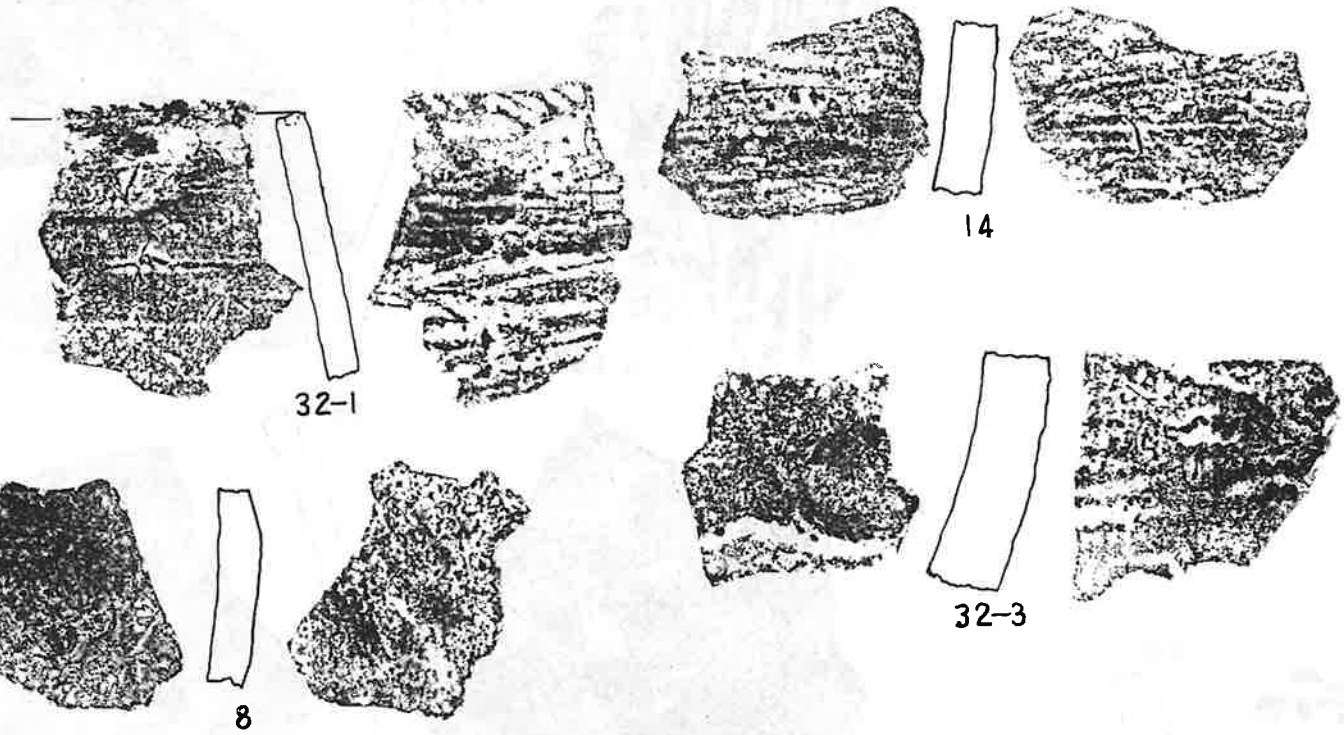

81

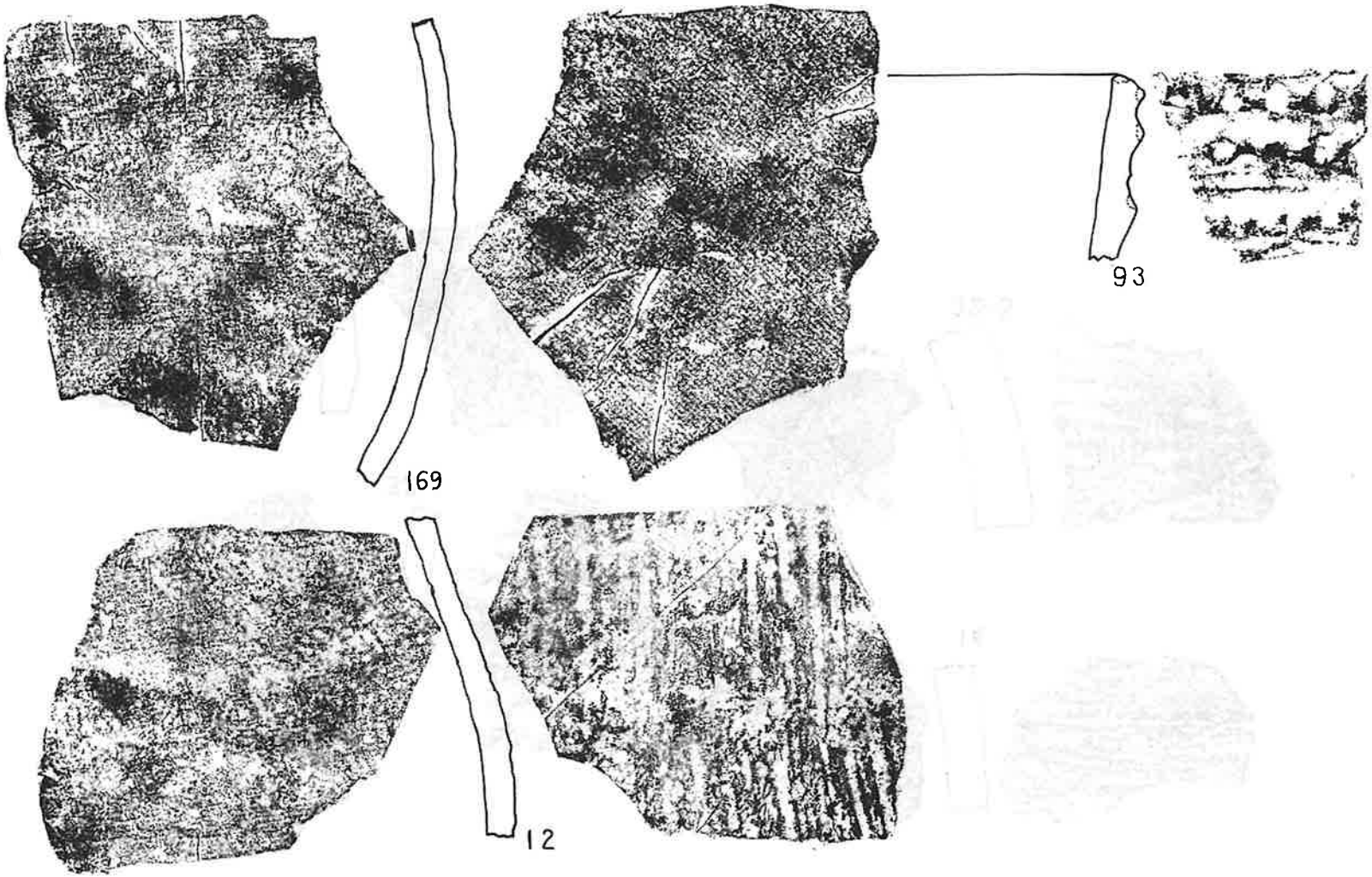

101


152

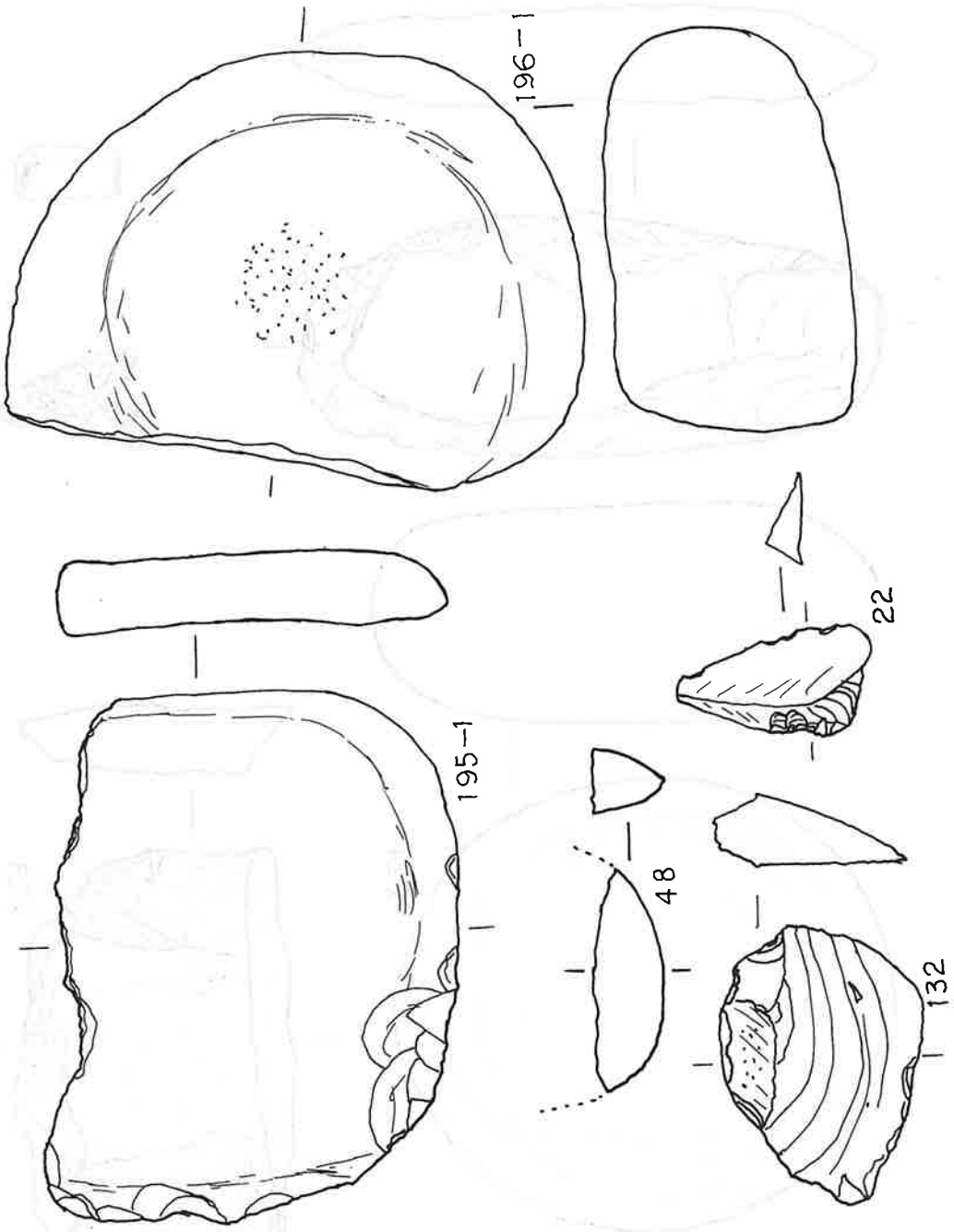

52
166
190
91
187
141
160
165
31
91-2
96
113
91-3
91-1

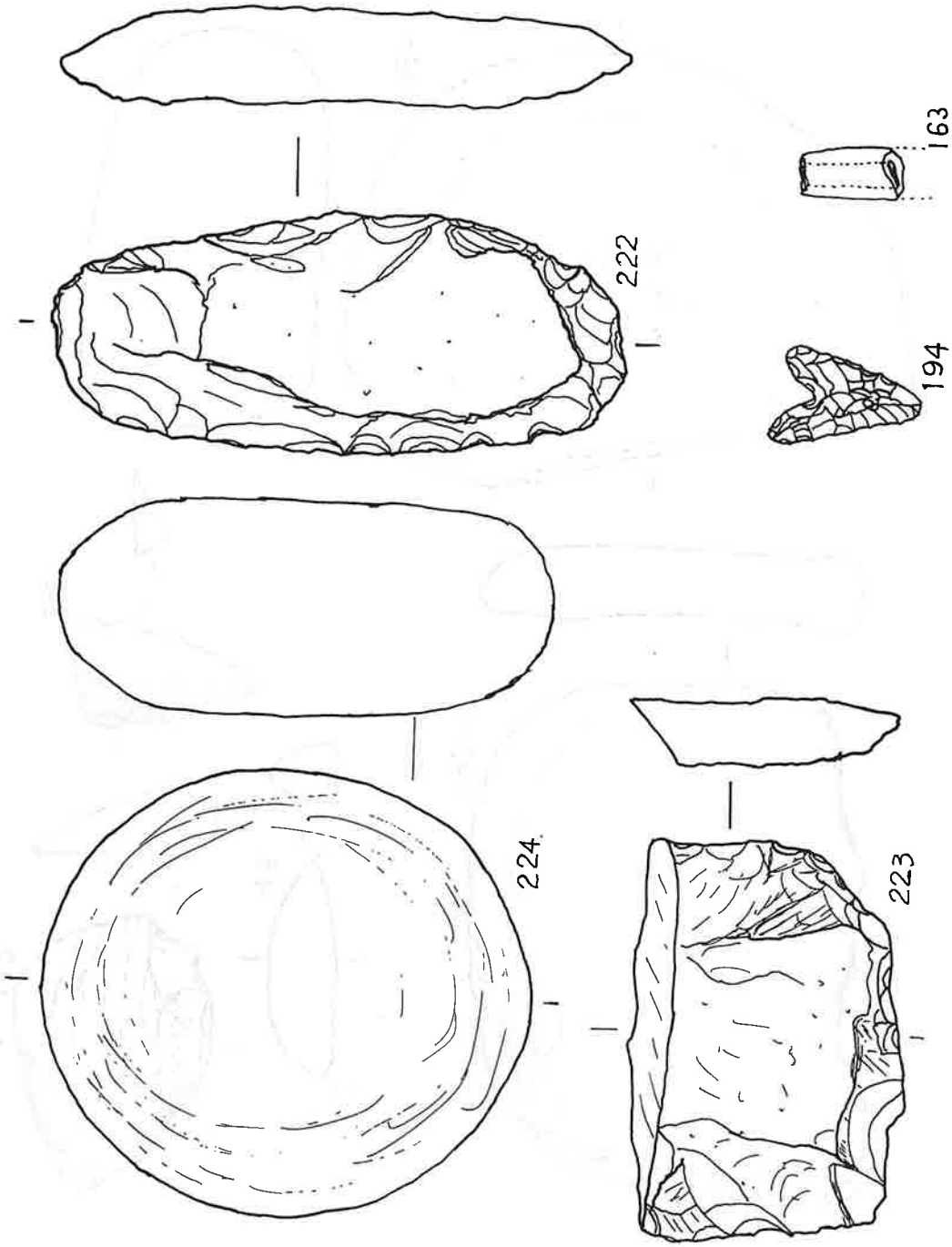
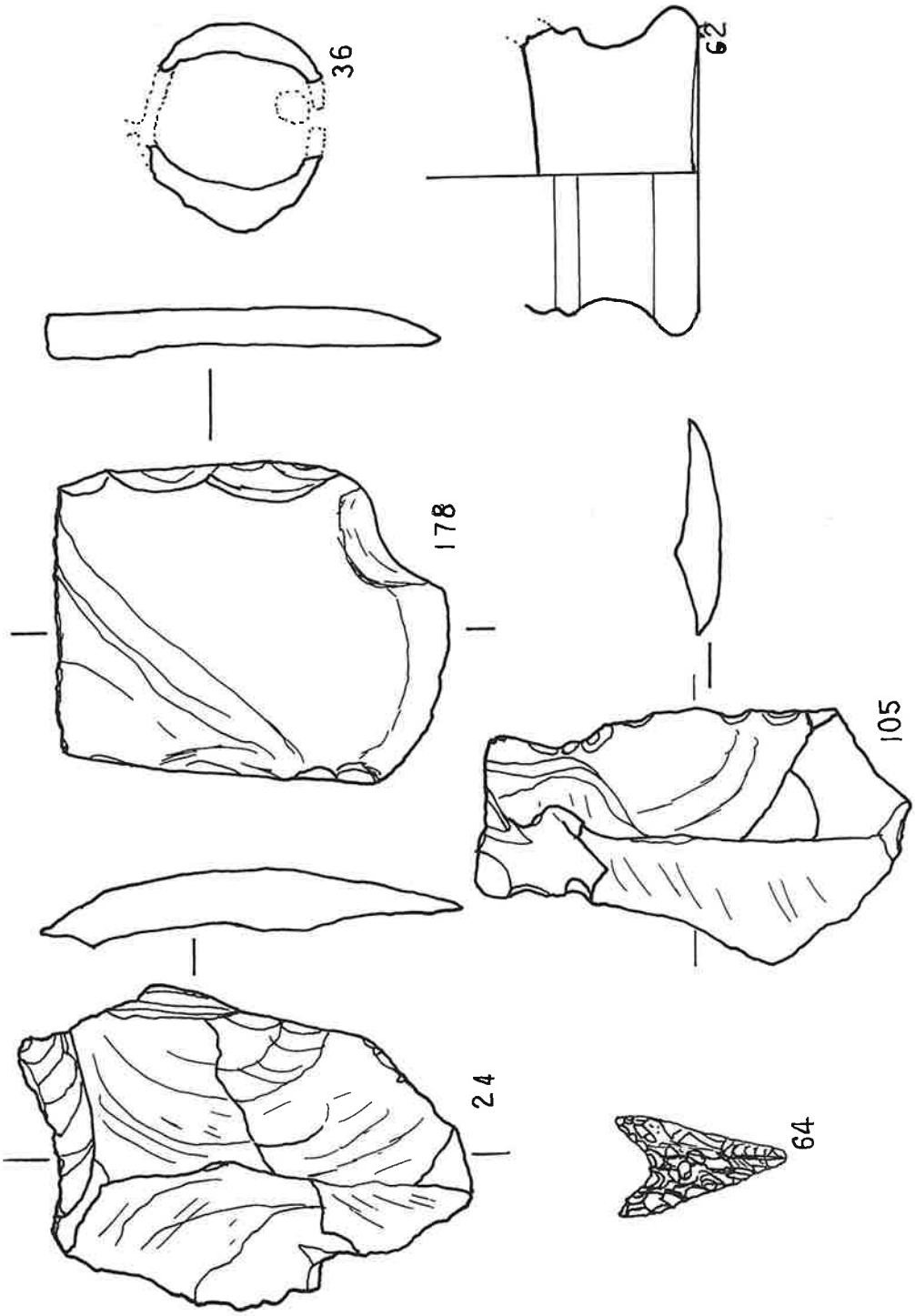

176
185
108
66


32-1
14
8
32-3


169
93
12

石器実測図




163
222
194
224
223

石器・土器実測図（36は土錘、62は土器）